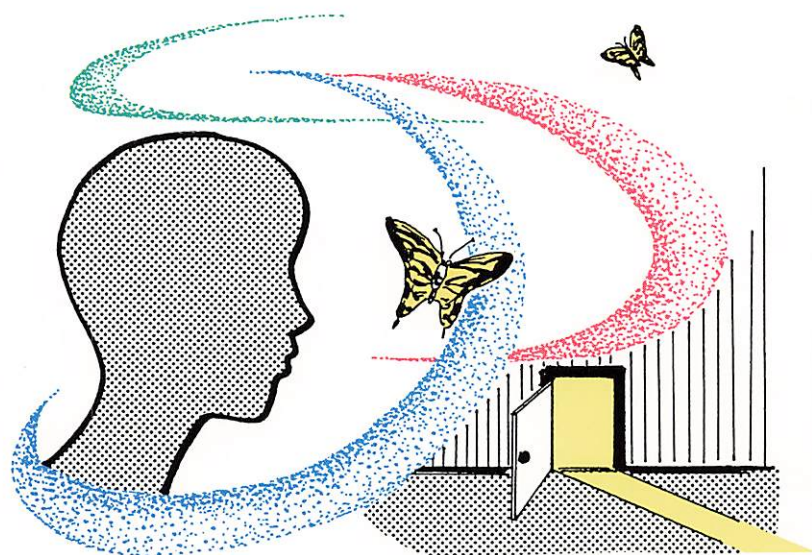


第六回 教文研教育シンポジウム記録

高校改革をどう進めるか

——ポスト神奈川方式をめぐる——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・ 山岸 隆夫

(横浜市金沢中学校教諭)

・ 土屋とし子

(横浜南部教育を語る会代表)

・ 加藤 晴夫

(神奈川県PTA協議会常任理事)

・ 清水 嘉治

(神奈川大学教授・元県高課研究会長)

コーディネーター

・ 広瀬 隆雄

(桜美林短期大学専任講師)

1994年10月29日(土)
於：藤沢産業センター

開 会

○司会 定刻になりましたので、ただいまより神奈川県教育文化研究所主催の第六回教文研教育シンポジウムを開催いたします。

私は事務局長の榎本と申します。全体の司会を務めますので、よろしくお願いいたします。初めに主催者を代表しまして、神奈川県教育文化研究所の倉持所長よりあいさつをいたします。

あいさつ

○倉持 巳佐男 県教文研所長 教文研の倉持でございます。

土曜日の午後、天候の悪い中、また、何かとご多用のところをこのシンポジウムにご参会をいただきまして、大変ありがとうございます。

県教文研としては、九二年の一〇月からこうした教育シンポジウムを開催してまいりました。高校教育改革をテーマとするシンポジウムは今回が四回目でございます。今までのシンポジウムの中では、いずれも論議の焦点が高校入学選



抜の問題であったと思います。今回もここに掲げてありますように、「高校改革をどう進めるか」というメインテーマでございますけれども、「ポスト神奈川方式をめぐって」とサブタイトルにありますように、高校入学選抜問題に論議がかなり集中するのではないかと考えております。

皆様、既にご承知のように、高校改革は全国的に活発に取り組まれております。その中では高校の個性化、多様化が一つの太い軸となつていてと考えられます。そして、そこには学校選択の自由問題が裏腹のように横たわつてゐるのも事実でございます。神奈川県におきましても、きょう、シンポジストとしておいでをいただいております清水先生が会長をされておりました高等学校教育課題研究協議会、略して「高課研」と呼んでおりますが、高課研が九一年の一〇月に発足をいたしました。ずっと審議を続けられて、昨年の一二月に最終答申であります第二次報告が発表されました。これを受けて県教育委員会は、本年の五月に「中間報告」、七月に「選抜制度改正大綱」を発表しております。この中で二五年間続いたア・テストを選抜の資料とする、いわゆる神奈川県方式は九七年から廃止をすることになっております。

この改正大綱に対しましては賛否両論がありますが、このシンポジウムの中でもシンポジストの先生、あるいは皆様の方からいろいろな論議が出されると思ひます。県教文研としては、この高課研の審議が深められつつある九三年の四月から、教文研の中に設置されております教育改革研究委員会の中間、高校改革問題を集中的に議論するために作業部会を設けました。この作業部会で精力的に一年半余論議を重ねてまいりました。昨年の一〇月にその「中間報告」を出しまして、一〇月二三日に横浜市教育会館で開催されました、第四回教育シンポジウム「神奈川の入試制度を問う」の会場におきまして、全参会者に資料として配付を申し上げたところであります。

その後さらに論議を重ねまして、本報告として取りまとめましたのが、「高校教育改革の方向と課題」という冊子でございます。これはこの一七日に印刷ができたものでして、きょうの会場で資料として皆様に配付をいたしておるところです。ぜひお読みをいただいで、ご意見をお寄せくだされば大変ありがたいと思ひます。

この作業部会の中ではいろいろな面から多角的に議論をいたしました。その中で高校改革の中心的な課題として論議をされたのが、高校間格差の是正の問題でございます。高校間格差、学校間格差というものについてはいろいろな見方、考え方、議論がございますが、いずれにしましても、格差の是正と入学選抜方式が直結をしているという認識に立って問題を考えなければならぬと考えているところであります。

高校改革の基本は、高校進学を希望するすべての子どもたちが安心して進学できるようにすることと、入学した生徒の個性を生かした高校教育をどう保障するかということにあると思います。本日はそれぞれ専門の先生方、あるいは保護者、県民の立場からのシンポジストのご意見をもとにして、ご参加の皆様にも活発な意見交流をしていただきまして、実り多いシンポジウムになりますことを心から念願をいたしまして、ごあいさつにかえる次第であります。ありがとうございます。

○司会 続きまして、今回のシンポジウム開催にあたり大変お世話になり、また共催もいただいております。湘南教育文化研究所の竹村理事よりごあいさつをいただきます。

○竹村雅夫湘南教文研理事 こんにちは。地元の湘南教育文化研究所の竹村と申します。

大変足元の悪い中をこの藤沢までおいでをくださいまして、ありがとうございます。また、コーディネーター、シンポジストの皆さん、大変ご苦勞さまでです。

地元の湘南教育文化研究所としましても、この間、さまざま教育相談、教育に役立つような資料の収集、また、最近ではさまざまな講演記録等の発行や、教育実践講座などの活動を進めてきたところです。しかし、この間何とんでも私たちが非常に大きな関心を持ってきたのが、この高校の問題でした。この地元にはA高校という高校が存在しています。



神奈川方式が現在のような形になる以前には、それこそ全県から寄留という形でA高校への集中が行われていた。その意味では、学校間格差の最たる部分がこの藤沢の地に集約をされていたわけだ。それが、現行の神奈川方式によって、一定程度解消されたことも事実でした。

もちろん、現行の神奈川方式には、さまざまな功罪があると思います。特に、高校間格差をどのように是正するかという問題。それから県内では学区の縮小が進んでいたわけですが、この藤沢、鎌倉学区に関しては、学区の縮小が行われなまま県下でも最も大きな学区の一つとして残ってきてしまっていたという問題。あるいは特にこの地域では学校五日制にかかわって、教育のこれからのあり方の一つのキーワードとして、「ふれあい」や「ゆとり」ということ、これに力を入れた実践が進んできていたわけです。そうしたこの地域の実情から見たときに、今回私たちの前に提示された新しい高校入試の姿というものは、そういった意味の私たちの期待からすると、少々違和感の大きなものだったのは事実であります。

しかし、ともすると、私たちの議論というのが、何か一つの悪者を見つけてそれをやつつければすべてが解決するんだといった論議の方向に行きがちなきらいがあります。そうではなくて、さまざまな方面からいろんなものの功罪を冷静に検討しながら、どんな道があるのか、いわば特効薬というものはないと思いますけれども、その中で皆さんの知恵を集めながら、幾つもの論議を重ねてどうその姿をつくり出していくのかが、こんな機会だからこそなお一層重要だろうと思っております。

そういった意味で、きょうのシンポジウムは大変期待をしております。どうぞ皆さんよろしくお願ひします。

○司会 どうもありがとうございました。

シンポジウムに入る前に教文研の宣伝というわけではないのですけれども、少し紹介させていただ

きたいと思っています。

県教文研では、シンポジウム記録集を発行しております。「不登校」と「高校問題」で都合五冊ほどになっております。会場に持ってきてありますので、希望の方にはおわけいたします。

それから小さなチラシは、「教育相談」の案内です。電話番号が下に書いてあります。専任のカウンセラーが受け付けておりますので、相談事がありましたら、ご利用下さい。

また、本日皆様に配布した「高校教育改革の方向と課題」という冊子については、先ほど所長の方から話がありましたので、詳しくは申しませんが、県の大綱と高課研答申が資料としてついております。本文部分については、教文研で十分検討してつくった冊子ですので、あわせてご紹介をしたいと思います。

シンポジウム

○司会 では、早速シンポジウムに入りたいと思います。

まず、コーディネーターの広瀬先生を紹介します。広瀬隆雄先生は、現在、桜美林短期大学で専任講師をなさっております。教育行政がご専門です。当教文研の研究評議員もしていただいております。では、広瀬先生、よろしく願います。



○ 広瀬（コーディネーター）「高校改革ラッシュ」と言われているように、九〇

年代に入ってから、全国各地で高校改革が活発に行われています。神奈川県でも今年の七月に県教委が高校改革の具体案を出しました。今回の神奈川県の高校改革の大きなポイントの一つは、ア・テストがなくなるということです。今の中学一年生が受験する九七年の入試からア・テストのない入試になるということです。もう一つは、複数志願制という制度が取り入れられたことです。つまり、志願するときに第一希望と第二希望の高校二つを志願できるということです。第二希望の方は定員の二〇パーセントという枠が決まられています。このように枠が決められた複数志願制は全国でも神奈川県が初めてです。この二つの点が今回の大きな改革のポイントであろうと思います。

それ以外にも例えば中学校のあり方、高校のあり方に対しても重要な問題提起がなされています。一つは、中学校における進路指導のあり方だと思えます。つまり、偏差値によらない進路指導をいかに行うかということが第一点。もう一つは、高校に関して言えば、高校の特色づくりを進めていくということです。それともう一つは、入試制度の多様化。この三つが三点セットと言われているもので、今回の高校改革の目玉になっています。

きょうは、こうした高校改革の動きをどのようにとらえたらよいのかということを中心に、いろいろな立場の人に話をしてもらって議論をしてみたいと思います。また、単に批評をするだけではなくて、よりベターな改革のあり方はどういうものなのかということまで議論ができればと思っています。ここでシンポジウムの進め方について一言述べておきます。これからシンポジストの方々にそれぞれ一五分ほど話をしてもらい、一通り終えましたら、休憩を一〇分間ほどとりたいと思います。その後フロアからの質疑応答などを交えて議論をしてみたいと思います。それでは、早速始めたいと思

ます。

まず最初は、並んでいる順番とは違うのですが、「横浜南部教育を語る会」の代表をされている土屋とし子さんから始めていただきたいと思います。土屋さんには高校三年生と中学三年生のお子さんが二人おられます。高校生の受験の体験などをもとにしながら、高校のあり方についてお話をしたいです。ぜひ、よろしくお願ひします。



○土屋（横浜南部教育を語る会代表）　こんにちは。私たちは横浜市の南部地域に住む母親たちのグループです。私たちは最初内申書の問題について話し合っていたのですけれども、そのころちょうど県の方で高校入試改革が始まったということを知って関心を持ちました。

私自身、今、高三の子どもがいますけれども、高校受験を経験しているんなことを感じました。結果的に子どもは希望の高校に入れてよかったのですけれども、振り返ってみますと、親である私がいまず不安にかられたことを思い出します。というのは、子どもが中一のときに近くの県立高校の見学会に行ったんです。その高校は環境もよくて、家から近いし、子どもを通わせるのにいいなと思ったのですけれども、先生が成績のことを話されまして、「この学校は五段階評価の大体オール四ぐらいのお子さんが集まってくるようです」と言われたんです。そのことに大変ショックを受けました。こんな高校がいいんじゃないかと思っても、成績が足りなければ入れない。その現実にはぶつかっただけです。

そして、考えてみますと、その不安はどんな成績の子にもあるということなんです。成績が悪い子にとっては、自分を入れる高校があるのかどうか。また、ある程度の成績の子にとっても、どれだけ頑張ればどこの高校に入れるのかわからない。そんな不安です。

そして、そんな不安な状態にある子どもたちが集まっている中学校ですから、学校内で二年の後半からいろんな事件が起こりました。それも受験に関係のある大事な試験の後先に起こっていたように思います。我が子もア・テストの後だったと思いますけれども、些細なことでもけんかになって目を殴られることが起こりました。それと、三年の二期期だったか、定期テストのころだったと思うんですけれども、夜に学校が荒らされて、美術の作品、そのときは絵本をつくっていたんですけれども、それが破られることがありました。

そのときだったか、別の事件だったかはっきりしていませんけれども、翌日学校へ警察の人が来て、指紋をとっていったということ子どもから聞きました。そういうことを目の当たりにしていたので、子どもたちの不安を解消するといいますか、高校に入ることがもつと子どもたちに希望を与えるものにならないだろうかということ、入試制度の改革の動きに注目して、会の中でお互いの経験や考えを話し合ってきました。そして話し合っていくだけではなく、その中から出てきた意見を直接届けたいということで、今まで三回にわたって、意見書、要望書の形で高課研や教育委員会に提出してきました。

それで、七月に改正大綱が出されて、会の中でもみんなで読んでみました。本当にわかりにくくて、理解するのに大変苦労しました。理解する中で、こんなに複雑で、実際に使われることを考えると、中学や高校の先生に今まで以上に負担をかけそうな選抜方法がどうして必要なのだろうかと考えました。大綱の中には「生徒一人一人の個性や能力、適性を大切に」と書かれているのですけれども、そのためにどうしてこんな選抜方法が必要なのか、どうしても結びつかないのです。

そして考えていくうちに気がついたんですけれども、この選抜方法は子どもたちのことを先に考えられたのではなくて、「特色ある高校」をつくっていくことが主にされたということに気がついたんで

す。こう考えると、新しい選抜方法である推薦制の拡大や複数志願、調査書の点数以外の部分の重視などがすべてすっきりと理解することができました。

そして、改正大綱が出される前に「中間報告」が出されたんですけれども、その後に私たちが県教委へ「中間報告」の内容について質問に行ってきました。そのときは会員以外の市民の方たち、新聞に私たちの会のこと載ったときに連絡をくださった方々と一緒に楽しく行って来たんですけれども、そこで幾つかの質問をしました。

その中で複数志願制について、「どうして試験を二回受けることにしなかつたんですか」という質問をしたんです。それに答えて、「試験を二回すると子どもにとって負担になる。そして一つの教室に一回目の試験に受かった子と、そうでない子が一緒にいるのは子どもたちにとってよくない」と言われたんです。この答えは、そのとき「中間報告」に普通科への推薦制ということが盛り込まれていたのですけれども、それに対する私たちの反対理由の一つと同じなんです。どうも、子どもたちのために」という言葉が頭の中だけで都合よく使われ過ぎているのではないか、そんな気がしました。

そんな中で、私たちはもつと子どもたちの立場に立って入試制度や高校教育について考えていかなければならないのではないかと思っています。私たちが考える場合は、お互いの子どもや近所の子どものたのびを具体的に頭に思い浮かべながら話し合ってきました。

例えば近所に高三の子どもの同級生が何人かいるんですけれども、一人は定時制を中退して、今は何もしていないようで、道を歩いている表情がとてもうつろなんです。そういう子とか、あるお父さんが、その子は希望の公立高校を落ちて遠くの私立に通っているんですけれども、「通学に時間がかかるので部活ができなくて、運動ができないから太っちゃってね」というふうに嘆いていました。そのお父さんが「勉強をやらないんだからしょうがないよ」と言っていたんですけれども、そういう言葉

も気になります。そしてもう一人、公立高校を落ちて土木作業をやっている子がいるんですけれども、その子は夜になると仲間もいっぱい集まって元気なんですけれども、中学を出て今までにオートバイで二度も大きな事故を起こして、大けがをしたそうです。その子がうちの子に「おまえは幸せだよな」と言ったそうなんです。そういう子たちのことを考えると、仲間と一緒にいることを必要としているんじゃないかと、希望の高校へ入学できていけば、もっと元気でいたかもしれないとか、同じようなタイプの子ばかりでなく、違ったタイプのお友だちや大人のアドバイスをもっと必要としているのではないかと、そういうことを感じます。

入試制度をつくっていく側の人たちは、それらの子どもや親の「声なき声」をもっと聞いてほしいと思うんです。そしてもっと強く問いかけるならば、「あなたは点数が足りないから、高校へ来てはダメよ」って誰が言えるのかということなんです。私たちが現場の先生や、その入試制度をつくっていく側の人たちに求めたいのは、一人一人の子どもたちが将来に向けて自分の生き方を見つけていくことをそばで大人が応援していく。そのことを実現していく方向で入試制度のことを考えたり、高校のあり方を考えていってほしいと思うんです。

私たちが高校に望むこととして、希望者の全員入学、それから学力面での学校間格差の解消、そして高校は入口で分けるのではなくて、入ってから多様な選択ができるようにと幾つかあげていますが、今、お話ししたようなことから考えてきました。

○広瀬 どうもありがとうございます。

高校改革をめぐる問題については、県のPTA協議会の中でも昨年から高校問題を検討する委員会が開かれて、継続的に話し合いがなされてきたようです。次は、神奈川県PTA協議会の常任理事をされている加藤晴夫さんにお話をさせていただきます。よろしくお願いします。



○加藤(県PTA協議会常任理事) 皆様、こんにちは。雨の中、多数お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

ただいまコーディネーターの広瀬先生からご紹介がありましたとおり、私は、本年度、神奈川県PTA協議会の常任理事として常置委員会の方は教育環境委員会に属しております。前年度も同じ委員会に属しております、二年間高校入試改革問題について、他の委員さんと一緒に検討してまいりました。

昨年度について申し上げますと、県PTA協議会はア・テストを入試の資料として存続することを強く訴えるということをやってまいりましたが、ご存じのとおり、本年度の七月一八日に出ました入試大綱におきまして、ア・テストは入試の資料としては使わない。制度としては残すが、入試の資料としては使わないという結論になりました。ですから、入試大綱が発表された後、どういった点で入試大綱に疑問点があるか、かつまた、それはどういった方法で改善できるのかということを日々委員会の中で討議を重ねてまいりました。

先ほど、冒頭に広瀬先生がおっしゃったように、今回の入試大綱の改正点は、平成九年度からア・テストが入試の資料として使われなくなる。そして複数志願制という制度になる。そして高校のあり方、中学校のあり方について問われていると骨子を申し上げましたが、私どももまさにそのとおりではないかなと思っております。

具体的に一つ一つを検証してまいりますと、まずア・テストが入試資料として使われなくなり、入試験、つまり学力検査は五教科で実施され、選抜資料の比率も現行の三〇パーセントから四〇パーセントと高くなるわけです。中学校の学習指導もいきおい五教科中心となり、他の四教科の勉強については手を抜いても構わないという風に生徒がなってしまう、現場の先生方が学習指導が今より

もやりにくくなり、困った事態になるのではないかと考えております。

そして、先ほど話に出ました複数志願制なんですが、土屋さんの話の中でおっしゃいましたとおり、一回の試験で第一希望、第二希望という方法をとるわけです。そうしますと、第二希望の進路指導を現場の先生は果して円滑にでき得るだろうかという心配を大いに持っております。今現在、中学校では進路指導の真つ最中ではないかなと思っております。現に私の娘で中学校三年生がおりますが、もう本当に始まっております。毎晩毎晩、両親、子どもを入れまして、「どの学校にしようか。公立がいいんだろうか、やはり私立の単願にしようか」という問題を話しております。

一つの希望校を決めるのにも親子でそれだけ話し合った結果を進路指導の先生方とまた相談するわけですね。それでは、それに加えて複数志願制という制度ができて、では、第二希望をどうするといったときに、これは本当に学校の先生方に対してエールを送るといっていいわけではないんですけれども、一次希望の高校を決めるのにもかなりのエネルギーが要るのに、第二希望をも考慮に入れた受験指導をなさる先生方の負担が非常に大きくなるという気持ちは非常に強いです。

そして、これは本当にざつくばらんとするか、口幅つたい言い方なんですけれども、「二つの高校を受けることができるならば」ということで、ここは湘南学区です。先ほどA高校という名前が出ましたけれども、例えば、自分としてはA高校へ入れないかもしれないけれども、二次希望で安全な公立高校を選んでおけば、イチかバチかやってみようかなという気持ちをもつ生徒が出てくると思うんです。二次希望で自分の入れるところを押さえておこうと。一次希望はイチかバチかで、ちょっとねらいの高いところをやってみようというふううに生徒が言ってきたとき、現場の先生方は「無理だからやめろ」とはなかなか言えないんじゃないかなと思います。そういったことも含めて、現場の先生方のご苦勞が大きいのではないかなと思っております。

あとは、私も県PTAとして非常に問題としておりますことで、出欠の記録の削除ということがございます。全国の都道府県で出欠の記録を削除しているのは大阪府だけです。あとは全部出欠の記録は入試の資料として添付しております。県教組の先生方、あるいは県教委の先生方とこの問題について私どもは話し合いました。話し合いましたが、皆さんから一様に「現在、入試の資料として余り重要視されていないものを残しておく必要はないのではないか」という答えが私どもに返ってまいりました。ところが、私どもが心配していることは、もし学校の勉強を少し休んで――出欠の記録が重視されなかったらですよ。うちで五科目の受験勉強をした子が、もし希望する高校へ入れて、それだまじめに学校に来ていた子、学校の勉強をしていた子が希望する高校に入れなかったというケースを想定した場合、ちよつとこれは恐ろしいことになるなという気がいたします。「決してそんなことはないよ」というお顔もちらほらと見られますけれども、県PTAといたしましては、そういったことを非常に心配しております。

時間の関係でもう一点だけに触れさせていただきます。きょうのテーマは「高校改革をどう進めるか」ということでございます、その高校改革の入口の議論として、高校入試改革の問題があると思うのですけれども、高校入試改革を平成九年から進め、そして同じ年度から「魅力と特色ある高校づくり」といったプランを発足させるべく、ことしの九月から県の高専教育課から各公立高校へ、そういったプランを出しなさいという指示が出ていると聞いております。そして来年の一月の中旬か下旬までに「中間答申」を出すようにと、こういった指示も同じく出ていると思えますが、九月に出して一〇、一一、一二、一の四カ月間で中間のプランを出してくれということ、余りにも拙速過ぎないかなという気がいたします。

そして、平成九年度から「特色ある高校づくり」が果して円滑にスタートできるのかということに



対しましては、非常に疑問に思っております。県の高校教育課の方とじっくり「特色ある高校づくり」のことについて話をする機会があったんですが、私どもとしてはトラック一周おくれで「特色ある高校づくり」が入試改革の後についてくるという認識を改めることはできませんと、はっきり高校教育課の方へ申し上げました。これは自画自賛するわけではないですが、私どもは正論だと思えます。

高校の特色づくりという受け皿が完備されない前に、入試改革だけをいじって、果して高校改革ができるかということについては実現が危ういなという気持ちでいっぱいです。

申し上げたいことは多々ございますけれども、以上の点だけに絞らせていただきまして、私の発言を終わりたいと思います。

○広瀬 ありがとうございます。かなり具体的な改革の内容に踏み込んだ問題点の指摘がなされたと思います。

今、加藤さんもおっしゃったように、これから中学校では進路指導のあり方が問われてくるのではないかと思います。

次に、横浜市の金沢中学校の山岸隆夫さんに、その辺の事情も含めてさまざまな問題について話していただきたいと思えます。

○山岸（横浜市立金沢中教諭） 横浜の金沢中学校というところに勤務しております山岸と申します。

私の方もたまたまこういう進路の研究会の方に入っております、その中で今までいろいろな形で検討してきて、考えてきたところを皆さんにお話ししたいなと思っております。

現在、一年生の担任をしております、今までどおりの形式でいきますと、完

全に変わる形での選抜制度を初めて受ける子たちが、ちょうど自分の今のクラスの子たちになると思っています。今までの中学校の進路指導は、お子さんをお持ちだった方とか、中学の先生の方はわかりだと思ってもすけれども、ア・テストがありました、一学期の成績が出るころに進路指導ということで、本来は高校だけではなくて就職も含めて専門学校、あるいは「高卒後、あなたはもうしたいのか」という形で子どもたちと話をしながら、高校に実際進学する生徒については、どういうふうにして進めようかという話をしていくわけなんです。そして二学期、ちょうど一二月ぐらい、これが終わるころにいよいよ親御さんと一二月にかけまして、どこを受けていこうかという相談をしていく形になるわけです。

ちょうど今ごろに私立の説明会がありまして、私立がどういうふうな形で生徒を募集するかということで、先生方から四方八方に分かれて、十数人の三年生の担任の先生がいたとしたら、多い日はその先生方が全部出るような状況で、午後の授業は五時間目を打ち切って、「三年生は帰りなさい。その間に先生方は出張に出なくてはいけないから」ということで、もうてんやわんやをしていて、その中でどこを受けようかという相談をしていくわけなんですけれども、基本的に私たちが中学現場として一番苦しいというのは、実際に行けない生徒がいることなんです。今の高校の選抜制度の中ではどうしても行けない生徒が出てきてしまう。ふだん私たちがテストの点数をつけている、成績をつけている、その中でもどうしても出てくるんですね。それが事実としてありますから、子どもたちも、みんなが行ける中で自分だけに行けないと、それが不安になって、親御さんもそうですけれども、実際に塾通い、受験勉強、それから非常なプレッシャーを感じながら中学校生活を送っていく。

授業の方はどうかというと、私たちの方もある程度プレッシャーがかかってくるのは、受験のところまで授業が終わっていないといけない。子どものそれぞれの個性にきちっと合わせて十分待ちな

が、クリアさせないうちにどうしてもタイムリミットがある。三年生までの段階で終わらなくてはいけない。その中でどうしても置いてきぼりになる子がいるのがわかりながら、それがどうしても全部クリアできない。そういういつも矛盾を感じている部分があります。

そして、高校進学をどこにしようかというふうに相談をしていくわけなんですけれども、どうしてもその中で中学から高校だけで話は終わりませんで、高卒後、その子が進学したいのか、どういう道へ進んでいきたいのか、そういう思いが子どもにしても、親御さんにしてもありまして、それにかなう高校を選びたいという自然な気持ち皆さん起こってくるわけです。そうすると、どうしても希望が重なる部分、より進学なり、就職なりに有利な高校に自分のお子さんを入れたい。自分もそこに進みたい。それは当然起こっている気持ちなんですけれども、それでランクがどうしても出てきてしまう。希望が重なってくれば、そこから今までの中では成績で明らかに、募集定員より希望者が多ければ、当然その高校には入れないわけですから、別の高校に行かなくてはいけないという不本意入学が起こってくる。

不本意入学については、中学の進路指導で受けさせなかったとかいう批判も時々出るんですけども、基本的には今は受けさせないということは実際にできないと思うんです。受けるか受けないかはやはり子どもと親が決めていくことなんですけれども、現実にはランクがある中で、私たちも難しいところは「難しいですよ」とはつきり言うわけです。そうすると、落ちるといことはやはり不安ですから、ある程度不本意ながらの選択をせざるを得ない。ですから、ランクがある中で、どうしても不本意入学が起こってくるわけです。私たちが受けさせないから不本意入学が起こるのではなく、ランク、序列がある中でどうしても不本意入学が起こってきていると思っております。

今回、選抜制度の変更を行おうということで、いろいろな形の選抜制度の変更の案が出てきている

わけです。例えば、推薦制について、今までは知識だけで、テスト成績だけで選んでいたのを、ほかの基準で選びましょうというふうに出ているわけです。選抜制度は、私たちが考えるに、どうしても誰かが落ちるということがある限りは、例えば推薦制によつて誰かが受かったとしたら、そのために別の子が落ちるんですね。誰かが受ければ誰かが落ちるといふのはいつも起こってくる。誰かに有利であれば、誰かに不利になる。そうすると、私たち、自分たちの子どもを見ていて、誰かに有利になると別な子が不利になるんですね。それがいつも起こってきてしまう。

それと同時に複数志願についても、今まで以上に希望に偏りがはつきり出てくるんじゃないかなと、先ほど加藤さんの方からもありましたけれども、勝負をかけるなんていう話もありましたけれども、そういうことが起これば当然偏りも起こってくるのではないか。選抜制度自体に「よりベターな」というのを私たちは今まで考えてきたんですけれども、「よりベター」もないんじゃないか。「よりベター」はあり得ないのではないかなと思います。誰かが落ちるといふこと、その誰かが落ちるといふことをみんなが受けたくないんです。実際に子どもたちにしてみても、親御さんにしてみても、ですから、その部分がどうしても苦しくなってくる。

今実際に高校に行けない子はどんな子たちかというところ、私がいままで担任をしてきた子どもたちについてみれば、ある程度教科が進んでいく中で置いていかれるなと思いつつ、ずつとそのまま置いてしまっている生徒。学習面で理解の速さに違いがありますので、その中で結局置いていかれてしまった生徒、それが中学校三年間過ぎていって、最後の段階でやはり高校に行けない。あるいは近ごろ多くなってきたのは外国籍の生徒ですね。試験では到底不利です。ふだんの授業でも、ふだんの定期テストでも不利な生徒ですから、どんなにうまい手で、母国語でたとえ問題をつくつたとしても、ふだんの中学三年間の中で不利な状況に置かれていたわけですから、最後の入試のところではや

っぱり不利になってしまふ。

それと同時に、例えば不登校になった生徒も非常に不利な立場になる。授業に置いていかれた生徒の中には、それも一因となって中学校の中で問題行動を持っている生徒、どちらかといえば、問題行動を持っている生徒は学習の理解が遅くなって、授業自体がつまらない。周りともなかなかうまく接しられない。そういう中で中学校の生活からドロップアウトしている部分もありますので、それがすべてではないですけれども、そういう生徒が高校入試の中ではじき出されてきている。

今、実際に行けない子たちはどういう生徒かというと、ある面では一番弱い生徒たちが結局はじき出されていると思います。基本的に私たちも選抜制度自体にはベターはないのではないかと思います。今現在、神奈川県にしてみれば、全員を入れるだけの施設と条件は整えようと思えば整えられないはずはないんですけれども、それが整えられない。何で全部を入れられないのか。全部を入れたとしたときに子どもは困るでしょうか。子どもは困らないはずだと思います。

一番困るのは一体誰なのか。高校にみんな入ったときに誰が困るのか。子どもは絶対困らないはずだと思ふんですね。そういうふうに考えると、高校教育は一体誰のためにあるかといったら、明らかに子どものためにあるはずなんですけれども、子どもが困る状況が今現在ずっと続いてきている。そういう問題は私たち大人の責任として考えていかなくてはいけないのではないかなと思います。

それと同時に、高校の格差と序列についても、高校の格差序列を追い求めていく意識が一方にあることは事実ですけれども、このランクが是正されていって困るのは一体誰なのか。高校が一番、二番、三番、四番と順番になっているときに、本当に子どもはそれで困るのか。自分より多少成績の悪い子が一緒にクラスにいて子どもは困りますか。競い合わせているのはある面では大人だと思ふんです。大人がそこへ集めさせて、大人がそこで競い合わせている。子どもはいつもその中でそういうふう

させられているのではないか。自分のクラスで言っても成績のいい子だって、悪い子だってみんな仲がいいんですね。それなりにある面では、生活の面では話が合うわけです。授業の中でできる子はできない子に教える。そういうのは自然に中学の中ではある面では起こってきているわけですけれども、それをすべて競い合わせの方に全部全部持っていっている。そういう点を子どもの視点から考えていかなくちやいけないんじゃないかなと思います。

では、子どもがどんなふうに通っているかということ、うちのクラスの、今はまだ一年生なんですけれども、書いたのがありますので、テストに関してなんですけれども、ちょっと読んでみます。

「ああ、プレッシャー、プレッシャー、プレッシャー、なぜこの世に中間テストがあるんだろうか。中間テストを考えた人は一体どこの誰だ。もうむかつく。ああ、もうやめた。勉強は全然はかどらないし、覚えたいたものが全然覚えられない。くそ、くそ、くそ、私は高校に行けないかもしれないな。私のケーキ職人になる夢がぶっこわれちゃうよ。なぜ人間はこんなにかつたるいんだろうか」。

一年生の子でも、もう高校入試をある面ではずっと意識しているんです。そこで自分の夢が実現していくかどうかというのは、やっぱり高校入試だと、ある面では親御さんからそんな話もあるのかもかもしれませんけれども、無意識のうちにそういうふうに通っている。高校に行けなかったら夢は実現しませんよと、もう自分である面では思い込んでしまっています。

こういう子たちもいます。今、この子はどちらかというとおくれがちな子です。今、私なんかが見ていても、このままずっと三年間過ぎていくと、かなり苦しい思いがするのではないかなと思っっています。例えば私がこの子につきつきりで一生涯命教えて、もし高校に入れたとしますと、そうしたときに別の子が落ちている。そういう矛盾がいつもこの選抜制度にかかわってくるし、そういう矛盾がある限り、本当に子どもの個性とか、選択の自由とか、選択権がない子、高校に入らないことによつ

て個性が無視されている子、そういう子を考えないで高校の話をして、どうしても一部の子はいつも追いやられていってしまうなと思います。こういう子たちも常に頭に入れて、高校というのはどうつくっていくかというのを考えていかなきゃいけないんじゃないかなと思います。

○広瀬 ありがとうございます。

今回の高校改革の細かい具体案をつくったのは県教委ですが、そのもとになったのが昨年の一二月に出された高課研の報告だったわけです。

次は、その高課研の報告を取りまとめた、元会長の清水嘉治さんをお願いしたいと思います。



○清水（神奈川大教授） こんにちは。私はきょう、制度論を話すために、教育とは何か、高校教育とは何か、我々の社会のものすごい変動の中で我々ほどのように教育にかかわっていくか、こういう視点から考えてみたいと思います。もちろん技術的な問題については後で質問があったときには回答いたします。

実は、私は九月の上旬に東アジアに行ってきました。私の研究テーマは世界経済論とか、ヨーロッパ経済論で、今までずっと三〇年以上イギリスやフランス、ドイツの経済の発展過程を研究してきた一人です。もちろんそれはアジアと、あるいは日本と、あるいは地域との関係の中でその問題を位置づけてきたつもりです。しかし、最近ヨーロッパに行ってもアメリカに行っても、あるいは今、日本の新聞、雑誌も、「東アジアは世界の成長の星である」と、言っています。そしてテレビも取り上げております。

六〇年代から七〇年代にかけては、隣の韓国、台湾地域、香港地域、シンガポール——いわゆるNIESは、どうして世界全体で先進国がリッチなのにこういう国々はブアなのかということで、この格差をどうなくすかということが大きな課題だったわけです。とくに経済自立にあたって厳しいの

ではないかという ASEAN の国、マレーシア、タイ、フィリピンさらにインドネシア、さらに南アフリカだとか、そういう国々の貧困の問題、飢餓の問題、あるいは環境悪化の問題を克服していくにはどうしたらよいかの問題でありました。こういう問題を我々は情報としてテレビや新聞、雑誌を通して受けとめているわけです。

そういう中で、どうしてこの一〇年間に東アジアが急成長したのかということについて誰もが疑問をもちました。今までですと、先進国の企業が途上国を搾取、収奪をして、貧困化をもたらしているんだらうと、非常に単純な方程式で考えていました。しかし、最近は違います。現場は実に労働環境もよくなりつつあるし、同時にものすごく働く意欲をもって対応しています。例えば私が行きましたタイの日本のある企業の工場、これはバンコクから七五キロも離れたところにあります。ここには率直に言って鉄道もありません。バスも二日に一遍ぐらいしかない。車はもちろん少ないです。その工場で働いている女性の平均年齢が二二―二三歳。そして仕事ぶりはものすごく真剣なんです。同じ年齢の学生を私は今大学で教えていますが、のんびりして学習意欲を感じません。タイの若者に学んでほしいと思いました。

はつきり言いますと、日本の若者は意欲をなくしているのではないのでしょうか。若年寄りが多くなくているといった感じですか。ここで、教育の源は何かということを考えてみたいと思います。皆さんもお子さんを持っているでしょう。あるいはお孫さんを持っているでしょう。しかし、どう考えても戦後の教育、これについては、さまざまな変化がありました。例えば文部省の昭和四七年の学校教育法施行規則には、高校に行きたい人はみんな入れるということを申し合わせているわけです。ところが、ご承知のように工業地帯にだんだん人口が急増してきました。ある地区の三つぐらいの高校に対して二倍も三倍も志願者がありました。そこでどうやるか。高校をつくれという動きが出てきました。全部入れろ、全入という要求が出てきました。当時我々も支持してきました。いま年を取っております

が、ここにいる倉持さんとも一生懸命にやってきました。戦後の二〇年間ぐらい一生懸命やりました。そのころは意欲がありました。

しかし、同時に社会も変わりました。教師も、それから生徒も、あるいは大学教師もそうです。一方で質素だから、貧乏だからと言いたくありませんけれども、とにかく改革意欲がありました。しかし、だんだん今日のように情報化社会、成熟化社会になりますと、一部の希望も達せられ、さまざまな人がさまざまな問題提起をし、それを一人一人自分で自己統治し、参加し、そして自分の意見を言う時代になったわけです。こうした内容をみんな持ちながら、それを超える哲学も、技術も、ノウハウも持ってきたわけです。

先程ふれました途上国の成長のひとつの源泉は教育だったわけです。タイでは今や九四パーセントの識字率、すなわち百人のうち九四人が教育を受けている。そしてその工場で働いている人の六〇パーセントは中卒、四〇パーセントの人が高卒、そして各工場の代表的幹部の日本人はわずか〇・五パーセントしかいない。それぞれの幹部は全部タイの女性です。その面で仕事の先輩と後輩は実にうまくよくやっていました。

もう一つタイで驚いたのは、ご承知のように、タイのような気候では一年間に五、六枚のTシャツでいいわけです。衣服代がかからない。タイ米については、私なんかよりも皆さんはよくご存じのように、日本の米よりも一〇分の一も安い。生活費が余りかからない。しかし、その工場で働いていると賃金が高い。同時に私がわからなかったのは、「あれっ、いい環境で働いているなあ」と思ったのは、エアコンの設備がどこの工場にもあるのです。私の大学の大教室にはエアコンの設備がないものですから、ことしの夏は閉口しました。わたしが見たタイの日本企業の工場の方が実に設備がいいのです。そういう比較もあえてしました。これは条件の問題です。

そこで、教育というのは自分たちの心が燃えて勉強したいという意欲を持たせる条件をつくることだと思えます。そして戦後、教育をずっと私たちは歴史的に、ここで見る必要があると思えます。この中で例えば四七年に出しました学校教育法施行規則、これを見ていただきたい。「教文研だより」の九三年一〇月号のところでも紹介しています。整理しますと、高等学校は希望する者全部を収容するに足るように将来拡充していくべきだ、これが方針でした。ところが、さっき言いましたように、経済の大きな変化で過密過疎地帯ができました。過密地帯では次から次に、人口流入に直面しました。横浜の場合には今から三五年ぐらい前には、アパートの間に教室をつくらざるを得なかったという事態が起こりました。文部省の基準に違反したことをやらなかったら、それに対応できませんでした。いわゆる人口激増期ですね。どんだん都会に人が集まって、そこに学校をつくらなくてはいけない。小・中は当たり前ですけれども、高校もつくらなければならない。そうすると、そこにいろんな問題が発生してきました。

すなわち受験地獄もそこから発生してきます。しかし、親の方はできるだけ自分の子どもをいわゆる一流大学に入れたいという気持ちがあり、一流大学でなくてもいいんですが、大学に入りたい。そして「いい会社」に入りたい。こういう気持ちになるのは当たり前なんです。にもかかわらず、教育の原点は、先ほど中学校の先生が言いましたように、共育という名の教育ではないわけです。ともに育てて、お互いに励まし合うのが教育の本質なのですが、現実はそのようではないのです。教育の本質、あるいはその条件を社会の変化が奪ってしまったのです。したがって、そういう社会状況を我々としては手直ししながら教育の中身を育てたい。こういう気持ちになってくるわけです。

そこで高校問題というのは、いろんな問題があるんです。どんな制度でもプラス・マイナスがあります。我々は旧制中学でしたが、そのころは二つの高校を受ける機会は全然なかった。一つの、自分

のうちから十分で通える金のかからない県立中学、そこに行くしかないわけです。それは最もすごい序列主義でした。そのころの試験は一発勝負でした。だがそのころの受験生には多様性がありました。できる人も、できない人もみんなが友だちになる。これは自然の形です。そういう形で学校社会というのはできたので、非常に私は楽しいと思えました。楽しくなかったのは上からの軍国主義的な教育だけです。

しかし、子どもたちの間、我々自身の間では自由に英語を勉強し、数学を勉強し、数学が得意な人は得意でない人を教えたり、できるだけ先生に頼らないで我々のころはみずからやったわけです。

ところが戦後は社会状況も変わってきて、とくに最近の成熟化社会の中で、誰もが自分の子どもを高校に入りたい、この点では誰もが一致すると思います。しかし、今度そこにおいていろいろな制約の問題が出てきます。さっき言いました、高校の数が足りない。あるいは高校では、はっきり言えば、二〇〇人とするところに二五〇人くるとします。そこに受験の問題がある。どう入れるかの問題があります。

その器に入れるために、そのことについて神奈川県がやってきたのは、ご承知のようにア・テスト方式です。これは組合と教育委員会がこれでいこうと一致したアチーブメント・テスト方式です。すなわち中学校で普通にやっていたら高校に入れるという問題意識から生まれました。この方式を三四年間実行してきました。それは、さっき倉持さんが言ったとおりです。にもかかわらず、どんな制度でも先ほと言ったように、社会や経済や文化がだんだん変化してくれば、教育の内容も変化せざるを得ない。今までの問題で何ら心配がなければ問題はないと思いますが、にもかかわらず、現実のアンケート調査や、あるいは新聞の一年間のさまざまな投書欄に出る中では、大きく分けて二つの意見が出ました。一つは、ご承知のように、従来どおりでいい。もう一つの意見は、もう一つの制度疲労を起こし

ているのだから、ここで変えてくれと。その変え方の問題でいろんな議論がありました。

高課研でやってきた仕事は、さまざまな立場の人の意見をきいたことです。一番有力な発言は、高校の校長先生の代表と、小・中学校の組合の代表の先生、高等学校の組合の代表の先生、この人たちの意見が一番自分たち自身の問題ですから非常に真剣でとくに現実の実態の課題を出しました。しかし、そうでない分野の人は、そういう意見を聞きながら、今までずっと実施してきたメリット・デメリットをどうやってまとめたらいいかを積極的にいいました。

すなわち「多様な個性ある生徒をつくる」という、その「個性」とは何か。「個性」とか「特色」とかいうのは響きはいいんだけど、その中身について本当に議論してきたのかどうなのかということとです。はっきり言えば、一九八〇年代から日本の「成熟社会」の到来とともに人間それぞれ十人十色一人十色という時代に入りました。それぞれの人にはそれぞれの、本人しか持っていない持ち味とあっていい人格、個性がある。人間としてのメリットをそれぞれ誰もが持っているわけです。それをどうやって生かしていくか。この点の議論は活発にでたように思います。

教科では、数学という形で、国語という形で、あるいは美術という形で、さらにスポーツという形で、あるいはその他課外活動でという形であらわれてくると思います。そういう多様な個性を持った子どもたちを本当に中学校では育てる条件を整えてきたのか。あるいはそういうことを真剣に教師一人一人が自分の問題として燃えてやってきたのか。あるいは高校の現場の先生同士がもっと話し合っていて、どうしてこういう制度を超えて、いい選抜方式というものを考えてこなかったのか。こういう意見も次から次に出了ました。

それから学区制の問題は、基本的に小学区制が正しいという意見もありました。にもかかわらず、自分の子どもはそこから越えたAという別な区の高校に行きたい。この保障をどうしてやるのか。あ

るいは先ほど言ったように、日本の企業の四〇〇〇社以上が東アジアに行っている。同時に日本の中でのもので、すごい会社の社員異動、単身赴任という問題があります。兵庫県の会社の人が神奈川県に赴任した。子どもは中学三年生である。しかし、ア・テストは終わった。「もうあなたはあきらめなさい」と、先生はいう。そういう子どもをどうするのか。極めて少数ですが、本人にとつては大問題です。にもかかわらず、さまざまな問題に対して、中学校の先生も、高等学校の先生も、今のような社会の猛烈な変化の中で自分たちの教育について、すなわち教科、クラブ活動について先生方も本心に自信を持って教えるような状況ではなくなっています。だとすれば、ますます子どもは悩む。そうだとすれば、せめて組合とか、教育委員会がもう少し現場を、先ほどのお母さんが言ったようなことを吸収して、どこまでできるのか。できないものは何か。できないとすれば、どういふふうの一つ一つ解決していくかという道すじ、ガイドラインというものを与えるべきだと思います。

にもかかわらず、今の市民社会というか、民主主義社会で、最終的には不十分な点もあったけれども、新しい方式が決まった。この方式を実行する中で問題点をどう埋めていったらいいか。先ほど言いました、一つは、複数志願制をどういふ方向に伸ばしていったらいいか、いい方向に持っていくことができるか。ア・テストのかわりに新しい、子どもたちが中学三年間で勉強したプロセスを客観的に先生方が評価して高校に送ってやる。高校の先生は、自分たちの高校はこんなに特色があるから、あるいは魅力があるから来てくれという自信を持ってやれる状況をどのようにつくったらいいか、こういうことを考えるべきではないか。

さらに高校の先生が、自分たち自身が、先ほど言った選抜が前提ならば、こういう問題を出して、その問題の中にどのように客観的評価をして個性をひきだすかを考えてはどうであろうか。テストの新しい方式みたいなものを高校の先生がそれぞれ編み出せないかどうか。もちろんこのようなことの

結果がわかっても、これをどういうふうに向きにプロダクティブに生かしていくか。その場合に今までの方式も継承・発展させるといふ問題意識の中で、先ほど司会者が言った、三位一体の方式をもっと内容的にいいものに行きたくないかということが私の問題提起です。

以上です。

○広瀬 どうもありがとうございました。

きょうのシンポジストの方々は皆さん協力的で、きちんと発表時間を守っていただき大変助かりました。初めに申しましたように、ここで少し休憩時間をとりたいと思います。

討 議

○広瀬 それでは始めたいと思います。

前半では、シンポジストの方々にそれぞれの立場から高校問題について発言していただきました。後半は、フロアからの質問なども交えながら、討議を行いたいと思います。

それでは、フロアの方から何か発言なり、質問なりがあったら手を挙げてください。お名前と所属をお願いします。

○中野 田奈高校の中野と申します。

皆さんのお手元に配られている「高校教育改革の方向と課題」という冊子を作った作業部会で一年半ぐらいいろいろな議論をしてきて、「中間報告」と「本報告」を出しました。一応問題の設定に従って書いていますので、言い足りないところはその冊子をお読みいただきたいと思います。まず一点、

清水先生にお伺いしたいことがあります。

私の勤めている高校は、神奈川で言うところ「課題集中校」という呼び方をしていますけれども、文部省流では指導困難校、底辺校だとか、教育困難校だとか、さまざま言い方をされていますが、学力的に余り振るわない生徒が集中して存在する、学区の中では最底辺に位置づけられている高校です。そこで私は七年間勤務しています。この七年間生徒指導をずっとやっているのです、そこら辺の生臭い話もずい分あります。先ほど土屋さんと山岸さんは格差の問題点みたいなことをおっしゃいましたけれども、今現在ある神奈川の高校間格差の問題、それが生み出しているさまざまな問題、こういうことについて「高課研」の答申の中には、私の読んだ限りでは一言も触れられていません。そういう議論がなかったのかあったのか。そこら辺のことについて、できれば会長であった清水先生に、格差の問題について高課研の中ではどういうふうに取り扱われて、どういう議論があったのか、お話しただけだと思います。

それから、これは中学校の先生並びに保護者ということで、土屋さんの方にもお願いしたいんですけども、今、特色づくりということで県教委が進めている「入試改革」。先ほど加藤さんは、かなり拙速過ぎるのではないかということをおっしゃっていただきましたけれども、私もその説明会に参加して、県教委の担当者からの説明を聞いていて、こんな短時間に今後の高校教育を方向づけるような改革ということを一つの学校で本当にできるのかと思いました。かなり厳しい質問や批判も含めて、説明会では時間を一時間ぐらいオーバーするような形で行われましたけれども、実際に新しい入試大綱の中で今進められているのは、多様な学校、多様な高校をつくり出すこと。それぞれの学校が特色を持ち、そういう中で生徒のそれぞれの個性に対応した高校をつくり上げるといって、「入試の多様化」路線です。「多様性」を一つのキーワードにしながら高校づくりを進めていこうという一つの路線があると思



います。

今の格差の中でそれを進めていくとどういうことになるかは、これは少し先を見ないと分かりませんが、正直言って、私も三年後、四年後にどうなるかということをも具体的に展望することはできません。しかし、今日の格差状況の中でこれをやれば、さらなる格差状況が生み出されるのではないかと、基本認識を持っています。そういう中で一つ一つの学校が、例えば学区の一〇校の高校が一〇校なりの特色を仮に持ったとして、そういう中で中学校の進路指導は、その多様な高校の個性に対応した進路指導をやっていくことが可能なかどうか。

なぜこういうことを申し上げるかという、例えば先ほど清水先生が意欲みたいなことを非常におっしゃいましたけれども、日本の今の状況を見ると、進路決定というか、意思決定が先へ先へ延ばされる形になっているわけです。私たちの高校でも高校三年になっても、自分の進路をどうしていいかわからないというのがたくさんいます。あるいは多分大学に行っても、自分はどういうふうに職業選択をしていくのか、人生の決定をしていくのかみたいな、そういう態度決定が先へ先へと留保されるような状況の中で、一五歳の段階で多様な特色に応じた進路決定みたいなことが実際にできるのかどうか、そこら辺をぜひ山岸さんにお伺い

したい。

土屋さんには保護者の立場で、あるいは子どももの立場から見て、そういうことが現実問題として本
当にできるのだろうか、そこら辺のことについてできればお願いしたいと思います。

○広瀬 ありがとうございます。

高校の特色づくりについては清水さんのご意見を聞かなくてもいいですか——いいですか。

それではまず最初に、高課研の議論の中で高校間格差の問題がどのように扱われたかという点につ
いて清水さんの方からお願いします。

○清水 高課研の全体の会合は年に四回もちました。その間、むしろ現場の先生、先ほど説明しまし
た中学校の先生、高校の先生、その他学識者で構成した小委員会は、月平均一回ぐらいもちました。
そこで出された問題には、組合の代表が入っているわけですから、格差是正の問題、序列化の問題は
当然出たと思います。全体の高課研の委員会の中には、「高校教育改革の方向と課題」の付属資料のと
ころに出てくると思いますが、そこには言葉としては出てきません。

私たちは討論の問題意識の中では、もちろんこれは先ほど言ったような、現場の先生からは、学校
間格差をどうなくすかという問題は当然議論として出たと思います。さらに今のア・テスト方式をや
つていくと、先ほど中学の先生もおっしゃったように、自分の教えている子をどの高校に入れるかと
いうことで、これは相当、先ほど言った、ア・テストの内容、成績をふまえて現場の先生は悩んだと
思います。「おまえはA校、おまえはB校、おまえはC校」という振分けで苦悩があったと思います。
それがご承知のように、今の制度の中では「輪切り」という言葉で表現されたと思います。そういう
言葉ももちろん出ました。

言葉の問題ではなくて、そういう問題をどうやって克服したらいいかという議論もありました。し

かし、全体会議では高校の先生、中学校の先生、大体六、七人だったと思います。それから社会人の方がいろんな発言をして、最終的にこういう方向で、ここでは基本方向の素案を提供して、その後は行政がやる。我々はパートタイム参加ですからね。最終的には先ほど言ったような方式を出しました。真剣な討論の連続の産物でした。

この問題で、むしろ注目したい点は、県内二カ所で討論会を開いたことでした。ここでも意見は半々なんですけれども、その意見のときに新聞記者が一人もいなかった。ところが、いざこういう方向の問題が出ると、新聞はあわてて書き始めて、いろんな意見を吸収してくれて、これでよかったわけですけれども、問題は、格差をなくしていくのにはどうしたらいいかということについて、現場の先生方はいろんな提案をしたことは事実だけれども、最終的にはこういう方向でまとまった。これが先ほどの質問の一番目の、言葉としては載っていないけれども、議論としてはありました。これだけは事実ですから言っておきます。

○広瀬 今のことについてよろしいでしょうか。

○中野 言いにくいことも多々おありだと思えますけれども重ねて伺います。例えば文部省の第一四期中教審の「中間報告」には、今日の日本の教育の最大の病理は学校間の格差と序列だということを明確に言っていますね。ということは、行政というか、最も力を持っている文部省が、今日の教育問題の最大の課題がそこにあると認定している中で、例えばおひぎ元の神奈川の「高課研」、これは高校教育課題と言っているわけですから、課題の一番焦点である格差と序列の問題を、どうしても少しこれを是正するなり、あるいは解決していく方向で問題設定をできなかったのかと残念に思うわけです。

確かにさまざまな議論があったことは、私自身も承っていますけれども、その議論の結果として行政に諮問をする場合に、こういう形での方向みたいなのが、少なくとも諮問の中には触れられてい

ませんし、議論だけやっただけでも、結果的には何も出なかったというのでは、これは意味がないわけで、そこら辺のところをもう一步踏み込んでお話ししていただければと思います。

○清水 全然裏も表もないですよ。まさに私自身は格差是正をどうするかを多面的に考えているひとりで。しかし、その場合に答申にどう盛り込むかということは、小委員会で今までの問題点を、すなわちほとんど現場の先生方ですが、その先生方の集約した意見をふまえた素案が出て、我々の全体会に回った。会長というのは独裁できませんし、そういうことをする必要もないし、みんなの意見で「これでいく」ということで最終的にまとまった。私は非常に民主的な討論であったと思う。一人一人に全部聞きました。それで最終的には高校の校長会の代表と、中学校の校長会の代表、組合の代表の意見の対立があったわけです。最終的に二人の意見の違いをみんなの前で述べて、どう一つにまとめるかということで、さらに詰めて最終的にはこうなったわけです。これが現実です。それ以外の何ものでもない。

○広瀬 もう一つ質問がありました。「高校の特色づくり」についてです。幾つかありましたけれども、その中の一つ、個性に基づく進路指導が果たして可能かどうかということですが、山岸さんの方からこれについてお話ししていただきたいと思えます。

○山岸 進路の問題は、もともとそうなんですけれども、高校受験だけではないわけですね。高校も含めて、その後の道をどうやって進んでいこうかという形なわけですけれども、具体的に今度、例えば「高校の特色はこういう特色にしますよ」と各高校さんが明示されたとしても、その先はわからないんです。その年に入った子は、「その高校はこういう特色ですよ」と言われても、その先、高校を卒業してそのコースに進んだ子はどういふふうになるかというのが全然見えなわけです。ということは、それを選ぶのは非常に難しいというか、そこを選んでいって、それ以降自分がどういふ

に進んでいくか先が描けない部分があります。

それから、高校自体も非常にたくさんあるという中で、実際どの高校が本当にこういう特色があるというのは、なかなか外から見ただけではわかりづらいところもあります。実際に入ってみてわかる部分も非常に多いのではないかと思います。ですから、外から見ただけだと、文言でこう言われても必ずしもそうはいかないのではないかな。

子どもにしましても、実際にそれぞれの子どもの個性に合わせて高校を選ぶということなんですけれども、現実的にはそうは進まないだろうなと思います。というのは、格差、序列の部分がそうは簡単にはいかないだろうな。まだどういうふうになるかわからない高校に自分の子どもを入れたいとか、自分が進みたいとはなかなか思わないと思うんです。やはりそこに行つた後に、その先の展望が見えるとか、そういうことになれば話は別だと思えます。ですから、不安を抱えている段階で評価が確定しないうちは、なかなかそこには進めないだろうなと思います。

子ども自体も、自分が何をやりたいのかというのがわからないのがほとんどだと思うんです。なかなか先が見えない。先に目を持っていても、先ほど話をしましたけれども、現実問題を子どもも感じています。高校に行けなかったら、どんなにいい夢を持っていてもそこでとまってしまふ。今実際に就職とか、そういうところに話が進むのは高校卒業、あるいは大学を卒業した後に初めて現実化の問題になってくる。昔みたくに小学校を卒業した、中学校を卒業したで就職という時代ではないですから、そういう状況の中でずっと自分たちが生きてきているわけですから、その段階でその先を描きなさいと言つても、なかなか描けないのが今の中学生ではないかなと思います。

○広瀬 進路指導の問題以外に「高校の特色づくり」をめぐるのは急ぎ過ぎるのではないかという問題、あるいはこれが果して格差是正に役立つのかどうかという問題もあると思います。土屋さんはこ

の間いろいろと県教委に申し入れをしてきましたが、特色づくりについて何か意見があればお願いします。

○土屋 さつきも言ったのですけれども、子どもの側から言いますと、今、学校間の学力の格差がある中で、どれだけ頑張ればどこの高校に入れるのかということが、子どもにとってはわからなくて、不安なわけですね。それに新たに特色のある高校というのが出てきても、ますます子どもは迷ってしまうのではないかと思います。一人一人の子どもの個性をのばすために高校に特色を持たせ……ということなのですが、子供は別に高校に特色が出来ることを望んではいないと思うのです。たとえすべての高校に特色が出来たとして、自分に合った高校を選べと言われても、今のように、学校間の学力格差と序列があるかぎり選べるのは点数の高い子だけで、その他の大勢の子どもは高校の特色を選んで入る訳ではないので、子どもによつては、その特色が自分にあわないと感じる子どもも多く出てくると思います。今ある専門コースですが、うちの子どもも英語が好きで、中学の先生から英語コースのある高校もありますよと教えてもらったこともあるのですが、本人が高校で特に英語にしほって勉強をしたいというまでにはいってないし、又、あるお母さんは体育コースへ行っても、体育大学へ入れるという保証がないんだからとおっしゃっていたし、そして又、高三の上の子の友だちで、情報処理コースへ行った子がいるのですが、その子は『俺、妥協して文系の大学にしたよ』と言っていたそうですし、だから一五歳の段階での子どもの特性なり、個性なりを固定させて考えるには無理があると思うのですが。

○広瀬 ありがとうございます。

ほかに何かありませんか。

○浅井 横須賀市で中学校の教員をしています浅井と申します。

意見を述べながら質問したいんですけれども、改正大綱を私も何度か読み直しをしてみて、私な

りにどういう形で今後進んでいくのかなという予測を立ててみました。これは私自身の予測ですから、またさまざまご意見もいただきたいんですが、まず高校は、「特色ある高校づくり」ということを県教委からさんさん迫られて、無理やりプランを出させられて、何らかの形で各高校が特色を保護者、子どもに示さざるを得なくなっていくと思います。その中身は県教委が既に各高校に例として示しているのを私も見たんですけれども、例えばボランテアを特色とする学校とか、部活動等を特色とする学校とか、選択教科幅の拡大を特色とする学校とかいう例が示されています。

これは私の予測ですが、全国的に見ても、この特色づくりが進められている中で、高校は多分二極分化していくのかなと思います。一つは、ボランテアを特色とする学校とか、部活動を特色とする学校とかいう、いわゆる課題集中校も含むランク、格差の中で低位に位置づけられてきた学校は、そういう形で何とか高校の特色を持たせようとせざるを得なくなっていくのではないかなと思います。

それから、大学進学を目指してきた高校は選択教科の拡大とか、そういう言葉を使いながら、実は大学進学を目指す特色づくりになお一層励むのではないかなと思います。県教委も「進学を特色とする学校も特色として認めるのか」という質問に対して、「ノー」とは言っていません。そういう意味では「進学を特色とする」という露骨な言い方をしなければいいわけで、例えば外国語とか、理数系とか、そういう教科、つまり、大学進学に有利な教科をたくさん選択教科でつくって、そこにかなりの単位時間数をとってやっていけば、今の予備校みたいな形で非常に大学進学に有利になるわけですから、「選択教科を拡大しました」と言いながら、大学進学を目指す特色ある高校づくりも進んでいくのではないかと思います。

これが「特色ある高校づくり」の私自身が予測するあり方になってしまふんです。これはぜひ高校の先生方にそうではない、うちの高校はこういう特色にするんだという、むしろ逆手にとった、これ

は本当に格差がなくなるような「特色ある高校づくり」をしていただくしかないですね。この「特色ある高校づくり」をやめることは、多分今の行政のあの意気込みからして難しいと思います。抵抗も抵抗なんです、逆な形で進めていくしかないのではないかと。そのときに問われるのは、大学進学を目指してきた高校が、全くそれを抜きにして、ランクの中で低位になろうと何だろうと、うちはこういう子どもをとりたんだとか、例えば外国籍の子どもを優先してとりますとか、障害者を優先してとりますとか、今まで本当に受験に不利とされてきた子どもたちを開かれた高校にしていくとか、地域と密着して地域に根差した高校をつくるとか、それが今まで大学進学を目指した高校にできるかどうかというところに私はかかってくると思うんです。

ましてポランティアを特色とする高校なんていうのは、ぜひやめていただきたいし、たった一部の生徒のための部活動等を特色とすることは本当にやめていただきたいと思っています。

それから、中学校ではどういう事態が予想されるかと言いますと、これは文部省も盛んに言っているんですけども、中学校一年生からのきめ細かな進路指導だと言っています。それは今までの偏差値に基づく進路指導ではなくて、その子どもの能力や適性や個性に応じた進路指導を行いなさい。それはきめ細かく一人一人に行いなさい。ということ、中学一年生段階から進路指導カルテをつくって、その子の個性と思われるようなことを一つ一つ書き出していつ、「あなたはこういうところに向いているのではないか」「あなたはこういう個性があるのではないか。だったら、こういう進路選択をした方がいいのではないか」という形で、無理やりに個性をつくらされて、無理やりに特色ある高校に行かされる。それが文部省の言うところの「行ける高校から行きたい高校へ」ということの実態になつていくのではないかなと思っています。そういう意味から言ったならば、私は、今よりひどい状況が相当生まれてくると思っているんです。

まず清水さんにご質問をしたいんですが、清水さんの口からも「行ける高校から行きたい高校へ」と、私は聞いたことがあります。本当に今のような予想される状況になるならば、子どもたちは本当に「行ける高校から行きたい高校へ」ということになるのかどうか。そうでないとすれば、清水さんがおっしゃっている多様な個性だとか、そういう子どもたちに合わせて特色づくりで高校を再生するんだということの具体的なプランを聞かせていただきたいと思うんです。

私は清水さんの口から、「私も格差是正論だ」という言葉を聞いたのは初めてです。でしたらば、格差是正ということを、どういうイメージで清水さんがつくられているかということ、具体的な形で教えていただきたい。今の高課研答申、改正大綱、改正大綱というのは高課研答申そのものですから、高課研答申を見れば、私が予想するような形になってしまっているのではないかなど危惧を持っています。

それから、加藤さんにご質問をしたいんですが、高課研の運営委員会の中では、ア・テスト存続派と、いわゆるア・テスト廃止派で、これではほとんど論議を費やしたと新聞報道でもなされています。先ほど清水さんが言った、格差是正問題は本当に論議をしたかどうか、というのは、論議されていません。私は、



高課研の議事録を情報公開制度で全部とりました。逐一読みました。ほんのちよつとだけです。中学校の教職員組合の代表と、高校の教職員組合の代表がそれを盛んに言っているも、ほとんど無視されていました。ア・テスト存続か廃止か、ほとんど廃止論者の大きな声の中で、文部省の言うところの高校教育改革とほとんど二つの答申しか出ませんでした。私は、そういう意味から言ったならば、高課研はア・テストをなくすためにつくられたものだと思います。

そこで、加藤さんにご質問なんですが、たしか運営委員会にはP T A協議会の代表という形でP T A協議会の会長が出られたと思います。ところが、ア・テスト存続ということを行ったのは、中学校の校長会と、中学校の教職員組合だけだと言われています。そういう中で冒頭お話の中で、P T A協議会はア・テスト存続を言ってきたというお答えをされましたが、その辺はP T A協議会内部で、つまり、私が言いたいのは、内部の問題を言っているのではなくて、そういう対立意見があるときには、P T Aという組織の声というのは相当大きなウエイトを占めていると思っっているんです。P T Aがどういう声を持っているかというのは、今の教育を考える上での声としては私も十分認めていますから、ですから、県教委もP T A協議会の代表を協議会の中に入れられたんだと思うんです。その辺でア・テスト廃止をたしか言われていたと思うんですが、その辺についての経緯がもしおわかりになれば教えていただければと思っております。

以上です。

○広瀬 二点ほどあったと思います。まず一点目について、つまり格差是正の具体的プランについて清水さんの方からお話ししてください。

○清水 私には質問者に聞きたいのですが、「格差」という概念をどういうふうにつかまえていますか。その点をお聞かせください。「格差」の理論的根拠ですね。

それから現実の問題ではありますが、格差の構造をどう受け止めて考えるかの問題だと思います。これは学校間格差、それぞれ能力を作る条件の格差、そういうものを是正する。学校だけではなくてその他いろいろな格差の問題があると思うんですが、「格差是正」ということは学校の条件上の格差なんですか、それとも進学を基準にした格差なんですか、その点をあなたはどうか考えていますか。

前も教育文化研究所で議論したかと思うので、二度お答えする必要もないんじゃないかと思っています。いかにして高校の序列化ができたか、格差ができたかということは、具体的にさっき話したわけですから、逆に質問したいですね。現場の先生が格差是正をするのにどういう具体的なプランを持っているかということですね。それだけでなくどのように具体的に実践してきたかです。

私は、いかにして格差をなくすか、なくす手段、方法というものを具体的にみんなの知恵を集めて、一つ一つ克服していく以外にはないかと思えます。恐らくこちらにいる皆さんもそのために共通に悩んでいるわけですから、その格差をどういうふうの一つ一つ具体的に克服していったらいいか。それは制度上の問題なのか、あるいは現に多くの先生方はそういう高校に行っていて、私も一つの大学でそういう問題を絶えず考えています。それをどういうふうにするかということ。大学の場合も今回の自己評価とか、大学間格差ということは非常に問題になっておりますね。これをどう克服したらいいのか。あるいは社会的には、要するに所得間格差という問題があったり、地域間格差という問題があります。

さらに私はこれも繰り返しません。国際経済の中での格差是正という問題、あるいは我々内部にある格差是正をどうするか、さまざまあると思う。ここでは学校間格差が問題で、それをどういうふうになくしたらいいか。そのための条件づくりをどうしたらいいか。今度この方式でそれがなくなるのかといったら、そう簡単にはなくならない。前の場合でもなくなかなかったわけですから、これをど

ういうふうにやるかということをもみんなの知恵を集めてやるのが大切だと思います。

教育委員会と組合の敵対関係の問題ではなくて、両者がもう少し具体的にこの問題について協力して提示していく。同時に我々もそういう問題について、例えばこのまとめはいいけれども、これは一つの方針であって、この方針を踏まえて県民がどういうふうにならなければならないかが大切です。高課研・教委主催の二回の県民討論会の中でも、またいろんな世論調査でも、はっきり言えば依然として大きくわけて二つの意見があるわけです。それをどう克服するかということが、お互いの市民社会の論理と倫理をもって、克服していく問題意識が必要です。一方のサイドだけでこれを押ししていけば必ず学校間格差がなくなるかというところ、そうではない。そうではない人との対立の問題が出てきます。これは恐らく先生間だってあると思います。高校の先生の間にもあります。中学校の先生の間にもあると思います。ですから、こういう方式の中で受験体制を、今までの教組が考えている論理の上でどういう土俵に持っていかという問題が一つあると思うんです。

それから、高校の先生は新しい方式を、現場の先生は、先ほど山岸さんは内容の問題を言いましたが、組合の活動をしている人は、文部省が出した高校教育の方針はけしからぬ、と言います。文部省は大学に対しても、さまざまな指針をだします。だが、こちらが自発的に「こうだ」と言わなかったら、大学では対応できません。小学校、中学校に行政が入ってきて、先生方の現場の自主性を踏まえて共同作品として対応してはどうでしょうか。スウェーデンでは校長を選ぶのは、その学校の先生方が投票で決めるといいます。もちろん教育経験が一〇年以上とか一つの条件があるでしょう。そういう人を選ぶ。日本の場合には、大学は学部長や学長を選ぶ自主権があります。ところが、小・中・高には自主権がないように思います。まずその辺の問題はやっぱり考えていって、相手をやつつけるのではなくて、こちらがこういうプランでやっていけば、少し前よりはよくなる。しかし、先ほど

言ったように、将来の予測を暗くみたら駄目だと思えます。これは世界の見方でもそうです。例えばアジアの見方だってそうですね。たえずどういふふうに向いていくかという論理と倫理を持ったないと、私は本物を把握できないのではないかと思います。その点を私はつけ加えておきたいと思えます。

繰り返すことはここで省略します。

○広瀬 格差是正をみんなで考えていくことは大切なんですけれども、質問者の意図は、清水さんご自身が格差是正の具体的なイメージをどう考えているかということだったのではないですか。

○浅井 ちよつとよろしいですか。質問した責任でなんですが、大変失礼な言い方なんですけれども、清水さんのお答えはたくさんの方を費やしながら何にも言っていないのと同じなんですよ。

○清水 あなたが理解していないのを残念に思います。

○浅井 私は余りたくさんの言葉は費やしていませんが、つまり、私がパネリストとしてそこにいられる方に質問しているわけですから。私も先ほどの田奈高校の先生ではないですけれども、格差問題というものをどうとらえているかということを高課研に質問したのと同じことだと思うんですが、私は清水先生個人にお聞きをしているわけで、格差是正論者だと言いましたから。私もこの報告書に携わった一人ですので、私自身はこの報告書に、格差はどうなくすかという具体的なプランは提示をしています。そこはお読みいただければと思います。ですから、清水先生の格差是正のプランをお聞きしたいと、私は聞いているんです。

○清水 それは学校間格差是正ということについてさきにふれてきました。

○浅井 そうです。

○清水 そうすると、私はいくつかの問題があると思います。

一つは、今まではア・テスト方式でやってきました。その方式には子どもたちに対する客観的評価をしてきたわけですが、評価の結果が格差をつくり出すという考え方があります。そうだとすれば、今よりも格差がないような評価方式をどうやって選択したらいいか、この問題が一つあります。

それから同時に、先ほども言いましたけれども、私たちの教育だけではないわけですから。具体的に経済生活を営んでいる、社会生活を営んでいる、そういう中で人口が流動します。神奈川県にどんな人が入ってきました。その場合に学校をつくる。例えばA高校と新しくできる新設高校、この間はどうしたって先生の指導だとか、教育だとか、あるいは今までの先輩その他の伝統的な方式、そういうものを継承するところと、全く新しく切り開いていくところでは格差がでてきます。基準というのは学力を中心にした格差なのか、あるいは「優秀な高校」とはあえて定義するとすれば、成績上位の中学生が行く高校なのか、偏差値だけの基準で考えていいのかという問題もあります。一方歴史的なところから規定される学校間格差もあるでしょう。さらに他方は、先生方の異動の問題もあります。先生方が新しい高校に行きたくない。しかし、行かざるを得ない。そうすると、どうしても先生方の中には、古いベテランの先生と、そうでない先生がいるでしょう。子どもたちの受けとめ方によって、それはまた違います。したがって、そうだとすれば、先生方の人事異動の問題、今は率直に言って、公立中学校、高校は異動ができるのは大体一五年に一度ぐらい。例えばA高校から別な高校の先生になるというのは、そういう先生方の人事異動の問題もあると思います。

それから同時に、人数の問題もあります。例えば少人数クラスにしていくという問題もあります。具体的には今の四〇人学級をどうやったら三〇人学級に予算上できるのか。もしできるとすれば子どもたちにもう少し積極的に教科の面でも、その他の面でも教えることができると思います。どうしたって規模の問題があります。そういうことを時間をかけて一つ一つ作っていくことによって、その格

差を克服していく努力が必要です。

あるいは学区制という問題もあるでしょう。すなわちA地区の中学校の高校志願者はその高校に全部が入れるとか、いろんな方式で少しずつなくすことはできると思います。その他社会的条件もさまざまな形で導入してこなかったら、これは直らないと思います。当然これは予算も伴いますからね。そう簡単にいかないでしょう。反対の方もいますから。

そういうふうにして私は一つ一つ、すなわち今の学校が置かれている実態、歴史の実態、それからそれに対するこれまでの組合の対応の仕方、行政の対応の仕方、それによってどういう問題が生れるかということも研究して、それを中心にして克服するための新しい政策的代替案を出していくことも必要になってくると思うんです。そういう意味で考えていただきたいと思います。

とにかく多面的に努力して時間をかけることです。

○広瀬 余りコーディネーターが口をはさんではいけないんですが、総合選抜のようなものは構想の中には入っていないんですか。

○清水 総合選抜も一つの提言材料になると思います。それは構想の段階でしょうね。

○広瀬 時間が余りないので、もう一つの方の質問にいきます。加藤さんのお話では、ア・テストの存続を訴えたとおっしゃったんですが、先ほど発言した方がきちんとこまめに議事録をお読みになっていて、むしろ廃止を訴えていたという新しい事実を明らかにしました。追及集会の場になってしまつと困るのですけれども、その点に関して加藤さんの方から。

○加藤 浅井さんでしたよね。この会場の中にはお母さん、お父さん方と同時に学校の先生方もたくさんいらつしやるのではないかなと思います。そしてご存じのとおり、PTAはTの先生方も一緒に団体なんですよと、まず最初にそのことを認識していただいで経過説明をいたします。

先ほど私は、県PTAの方の常置委員会の一つ、教育環境委員会に属していると申しました。そして現在までの二年間にわたって高校入試改革の問題、私どもがやってまいりましたのはほとんどこれのみです。学校週五日制の問題もテーマとして取り上げなければいけないと思っておりましたけれど、も、時節から高校入試一本に絞ろうよということ、常置委員会は絶えず検討してまいりまして、一番長いときは午後一時から始まりまして、食事の時間を入れたか入れないか覚えていないんですが、九時半まで延々と議論を重ねたことがあります。なぜその日に限ってそれだけ議論が長くなったかといいますが、常置委員会といたしまして、ア・テストを入試資料として存続させるか否かということ、テーマにした日だったと思います。そして最終的に教育環境委員会としましてはア・テスト存続と、「一五の春を泣かすな」と。と同時に一五の春にすべてを判断させるだけの、要するに高校入試の、どこへ行きたいかということすべてを本人に任せられるだけの能力は一五ではない。学校の先生と親とがある程度そういった側面的な援助をしなければ、一五という年齢では無理ではないか。こういう二本柱でア・テストの問題につきましても存続ということを決めました。それは昨年度です。そしてこれらの意見は、私どもは県教委、県教組、県の小・中校長会に対して、それらの団体との教育懇談会の中のすべてで昨年一年間申し上げてまいりました。ただそれが高課研に反映されなかったことは非常に残念でした。

○広瀬 ほかにどなたかいらっしゃいませんか。

○関野 意見を申し上げる前に皆さん方にご了解をいただきたいと思っておりますので、その点を最初に申し上げます。

私は、つい最近まで県会議員を二〇何年間やっておりますので、教育行政の実態、現場との関係、これについては議会側でどういう論議になって、どういう点をきちっと把握した上で行政がやってい

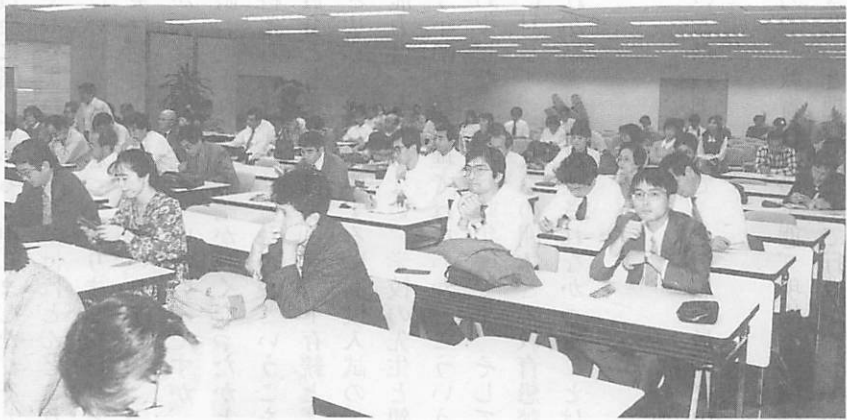
るのかについて、その実情を私はかなり知っているつもりであります。その意味でお聞き取りをいただきたいと思えます。したがって、パネリストのどなたかに質問という形ではなくて、私自身の体験した実態の上から、今考えている高校の教育改革をどう進めるかというポイントに合わせて問題点の指摘をいたしたい、こういうふうに思いますので、ご了解をいただきたいと存じます。三点ございます。

第一は、受験生徒の実態を中・高の先生方が一緒になってきちっと出しなさいということがどうしても必要だろうということが一つ。

第二番目は、普通高校全県一八学区に現在ではなっています。この一八学区になっている現状を、現在の姿はどうなっているかという実情をきちっと見なさいという問題が一つ。

第三番目は、教育改革を進める場合の方向性について、私は三点申し上げたいと存じます。それは後ほど申し上げます。

第一の受験生徒の実態、これは学区内全体の教師側の方を中心としてでありましょうけれども、これを把握することは教育改革上重要であるという点でございます。価値観の多様化とか、個性の自由化という視点を強調する余り、生徒全体の实態を見失っていることになるかすれば、これは重要な教育上の問題で



はないのかなと思うわけでありました。したがって、入試の方法を改善するだけでは、この問題についてアプローチする方法は生まれてこないと思います。

したがって、受験生徒の上の方の何パーセントかの生徒は、これは問題ないんです。しかし、下の方の数パーセント、これに影響を受ける大部分の生徒、これの実態をどうしても把握する必要があるだろうと思うわけでございまして、高校学区内の先生方と一緒にこの問題を把握することがどうしても必要だ。これが先ほど出ました、高校間格差の問題、あるいは少し進みますと、序列化の問題にもつながりますけれども、この背景としてどうしてもやらなければならない問題だろうと思います。

さらにこの点を数字で申し上げますと、中学校段階では全校生徒、平成二年統計調査でありますけれども、中学校の数は全県で四七六校あるんです。そして、その生徒は二七万です。この三分の一としても九万、三年生だけです。九万という数。これも正確に言いますと、九五パーセントですから約八万になります。八万全体の生徒に影響を与える今回の大綱の決定です。

高校側で言いますと、これも高校側の先生から聞いた話でありますけれども、全県高校一六五校のうちで中途退学者三、二七〇名、これに長期欠席者、原級留置者等を含めますと、六、五〇〇という数字になる。平成二年の教育委員会の調査です。仮に中退の三、二七〇名というこの数字は、四五名学級とすると三〇クラスの大規模校二校分に当たるんです。これがなくなってしまうわけです。これは大変な問題だと思っております。

○広瀬 できればポイントだけかいつまんで、手短にお願いたします。

○関野 それから、これは先ほどの清水先生の話にも多少関連するんですが、高課研の中で取り上げられている中学校の意見、何回、二回であります。それは西公会堂と厚木の公会堂でやった問題がそれに当たるわけでありませうけれども、これもわずかに中学校の生徒を持つ親と、高校生を持つ親の二

人が意見を言っているだけです。もちろんフロアで聞いている人は多いと思いますけれども、全県八万に及ぶ生徒全体の影響をこれで結論がでいいのかという問題があると思います。

それから、時間がありませんから次に進みますけれども、全県一八学区になっております普通高校の中学区制と称せられる制度でありますけれども、これも平均八・五校ですよ、一八学区の全県一六五校ですから。しかし、最低五校、最高一二校になっているんです。一学区の中の高校の数が一二校あるんです。こういう状態を県教委がかつて言った基準の「四ないし五です」ということから計算しますと、この学区はどうしても分割しなければならぬという方向にいかざるを得ない。こういう問題がございます。

次に、普通高校の中に今回提示されている専門コース、これは既設の高校一〇校に一二コースあるんです。これに今回新年度から四校四コースを設けますから、全体で一四校一六コースとなります。これは特色ある云々という先ほどの話に関連する状況でございます。しかし、これは全県一六五校の中で一四校ですから、大した問題ではないと教育委員会は説明します。これはそうでしょうか。これは現行八パーセントは学区外でも認めるといふ方向に立って考えると、教育委員会の意図するところは、その背景は明らかに現在の一八学区を拡大したい、広げたいという意図があると見られてもやむを得ないのではないかとこの点でございます。

その次に、教育改革の問題について三点ばかり申し上げます。

その一つは、現行の教育委員会の指導上の権限、これは横浜・川崎に及ばないんです。そういう実態になっているんです。県教委ではありません。なぜなら任命権者は川崎は川崎、横浜は横浜ですから、県教委がどんなにやっても任命権を越権して入るわけにいかないという状況になっているのが実情であります。この点は地方自治法二五二条の一九（指定都市の事務）の関係でも、市長に権限があ

って、そして県知事にはない。児童福祉法その他全部そうなっています。これに関連するわけです。

さらに、経済と教育の關係について、経済問題が教育關係に大きな影響があることは認めます。しかし、これだけは経済とは無關係ではあるが、どうしても教育問題として取り上げなければならぬという問題が私はあると思う。例えば非効率で時間が相当かかるといふ問題についても、教育問題としては取り上げなければならぬという問題がたくさんあるだろうと思う。例えば友情だとか、協力とか、愛情の問題とかいふのは、単に経済上の問題だけではない。そういう問題が教育問題として重要な問題だろうと考えるところでございます。したがって、この方向についての論議がどうしても必要だろうと思えます。

それから、今回県教委の示された多様化、個性の自由化、そういう視点だけについて高校側の対応がどうかということになれば、これでは高校の選抜の多様化の努力が進まないのではないかという結論にならざるを得ない格好になっていくんです。そうではなくて、その背景にある多様化の結論は、先ほど申し上げた高校の実態、高校教育の実態というものを、学区内は少なくとも調べるという問題を一番最初に申し上げましたが、どうしてもその点に触れないわけにいかないという点を考えるわけでございます。

この本にも出ておりますけれども、宮崎県並びに埼玉県の例で序列化、推薦化の状況について言っておりますけれども、宮崎県、それから埼玉県の例は大まかに言いますと、一定実験化ということになっているので、同一学区内の高校は普通高校については等質でよろしい。先ほど高校間格差の問題で論議がありましたけれども、これは極端に言えば、芸術・工芸を専門コースとして設けるのは全県で一つしかないんですよ。学区を外さないとできないでしょう。こういう問題になっている。したがって、私は、高校の特色の問題は、高校間における質は等質でなければならぬというふうに見える

わけでありまして、これがもしできなければ学区内の中学区制は崩れてしまうというふうに見えるところでございます。以上。

○広瀬 どうもありがとうございます。中学、高校の実態をよく調べてほしいということ、学区の拡大の問題、それから教育問題をもう一度根本的に討議することが必要だということが話されました。

ほかに質問はありませんか。もう余り時間はないのですが、ぜひ言いたいこと、あるいは質問したいことがあれば挙手してください。

○——（高校教諭） 私は、小田原の方にありますA高等学校に勤めておりますが、きょうは、実は中学生の子どもが二人おりますので、そういう立場でちょっと発言をしたいと思っております。

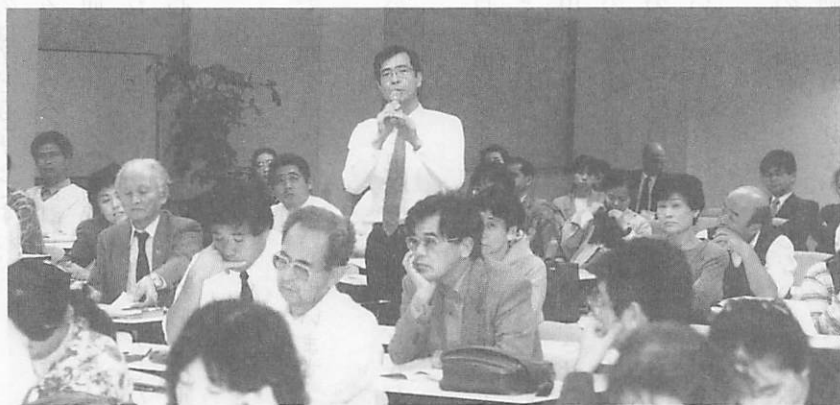
親として、今、だんだん高校入試が近づいてきた段階で一番思いますのは、一番最初に思った疑問は、高校がどんどんクラスが減っていつて教室があいていく。私の学校も一二学級の学校が一〇になり、来年九になるわけです。中学生の数も、三、〇〇〇名、四、〇〇〇名と減っております。率直に親の願いとしては、公立高校に、県立高校に入ってくれればいい。そういう願いを持っておりますので、特別に私立高校にということは考えておりませんので、できるだけ高校の入学の門を開いてもらいたい。

先日、私がY高校に行った帰りに、湯河原から電車に乗りまして、ちょうど四時半ごろでしたので、私立高校生が結構乗ってきました。東京の方の私立を希望されて行かれる生徒さんの多くはいいわけですけれども、そうではなくて、県内の県立高校に行きたいけれども収容してくれない。そういう子どもさんが静岡県なり、山梨県なり、あるいは全国の寮のあるような、そういう高校へ行っている。

私は県民の一人として、公教育、神奈川県公教育として、神奈川県の子弟を神奈川県立高校で受け入れる、そういう基本姿勢をきちっと教育行政には持つてもらいたい。

高課研の第一次報告では、幸い全日制進学率を上げるようにと、そういう答申がありまして、昨年、わずか一パーセントですけれども九二パーセントになりました、ことしはそれがまた据え置かれています。中学校の進路希望調査をやりますと、大体九五〇九六パーセントが全日制を希望するわけです。そういう希望と実際の教育行政の何を基準にして考えているかわかりませんが、九一パーセント、九二パーセントという差のところ、そのところに入れない生徒が定時制にやむを得なく行く。あるいは他県に行く。そういうところを教育行政はぜひ考えていただきたい。

もう一つは、先ほどもパネリストの方が言っていました、子どもが中心になってこの問題のことを考えてもらいたい。つまり、教育委員会の方が今回出しました案は、「中間報告」の段階で相当いろんな議論がありましたように、非常に複雑な制度です。複数志願制を初めとして、実際ふたをあけて見ないとわからないという声がいろいろ聞こえてきます。第一志望、第二志望、一体どういふふうに高校に希望者が集まるんだろうか。それから、ひよつとしたら大量の再募集をしなくてはいけないような高校も出てくるのではないか。それに今回は志願変更というのを全くフリーにしました。フリーにすると今案です。そういうことを考えますと、実際にそういう混乱するようなことが新しい制度を始めた



段階で起こってくるのではないか。そのときに一番迷惑を受けるのは子どもなんですね。

行政は、今回の大綱の中でも書いていますが、いろいろやってみて、いろいろ検討してまずい点を直していこう。そんなことを言っていますが、子どもはたった一回のチャンスで高校に進学するわけです。そのときに犠牲になっていく子どもたちのことを考えてみれば、こういう制度はきちっとした、しっかりした慎重な検討機関を置いて、そしてそういう子どもの心に混乱が起きないように慎重にやってもらいたい、そんなふうに思います。以上です。

○広瀬 特別に質問というわけではないですね。

それでは最後、これだけは言いたいということがあれば、これで質問を最後にしたいと思います。何かないですか。それでは手短にお願します。

○——（保護者） 質問ではないんですけども、私は藤沢市の公立小学校と中学校に通う子どもがいる母親です。職業は教育とは何の関係もありません。

それで、一つこれは言いたいのですけれども、入試を子どもの目の前にぶら下げて、それによって例えば授業を聞かせようとか、勉強をさせようとか、そういうことを思わないでいただきたい。例えばア・テストが外されることになりましたけれども、「そのときに中学二年生をどうやって勉強させた方がいいか困っちゃう」と言った先生がいるんです。そういう中学の教師がいるんですけども、私は、そういうのは情けないと思うんですよ。それが中学の教師の代表の声とは思いませんけれども、もしそういうことでア・テスト外しに中学の先生方が反対していたのであれば、だったら希望者全入なんて全く考えられないと思うんですね。

ア・テストを外したら二年生が勉強しない。それから実技教科の評価を余り重要視しないと実技教科をまじめにやらない。だったら、入試がなくなったら中学生に勉強させられないということになっ

てしまうわけですね。だったら入試を望んでいるのはあなた方教師ではないですかと私は思ったんです。人それぞれ考えが違うでしょうから、入試を維持したい人はそう思っているということかもしれませんが、先ほど全入ということで誰が困るだろうかというお話がありましたけれども、私は親ですから困りませんが、例えばヤンキーは入ってもらっては困る高校の先生とか、それから教師の言うことを聞かなくても無条件で本人が希望すれば高校に行けるということで困ってしまう中学の先生はいっぱいいると思います。

ですから、希望者全入ということをやつと掲げてやっていくのはいいんですけども、本当にそう思っているのか。そしてもし公立がそういうふうになったら、恐らく私立中学受験が非常に盛んになると思う。そこまで覚悟して言っているのかどうかということ。

私は、ア・テストも内申も要らなくて、試験は高校が勝手に考えてください。うちの高校は無試験ですという高校があってもいいです。数学で九〇点以上取れなければ絶対入れないという高校があってもいいと思います。とにかく中学校で一元的に支配されているということを少しずつでもなくしていただきたい。そうでないと恐らく学区を縮小して希望者全入と言っても、湘南学区を二つ分けるのに一〇年以上かけてもまだ分けていないぐらいですから、そういうことを言っても、多分一〇年たつても分けられないのではないかと感じますので、希望者全入とか、あるいは試験をやっている限り問題解決しないというのはそのとおりだと思っただけでも、だったら具体的にどうしたらいいのかというところを、そう言うておきながら、でも内申書を必要とするかというのは何か非常におかしいなと思っています。

○広瀬 ありがとうございます。全入というきれいなことを言っておきながら、片や入試で子どもをしぼる、そういうやり方はやめてほしいということだったと思います。

最後に、シンポジストの方々から一言だけ感想なり、何か意見を述べてください。山岸さんからお願います。

○山岸 今、お母さんの方から話がありましたけれども、私も全入で困るのは中学校の先生と高校の先生ではないかなと思います。その部分が一番大きいだろーうなと思います。

実際に小学校、中学校で、ある面では入学試験でずっと日本の制度は引つ張ってきているわけですね。それで大学で非常に大きなテストがなくなると、大学はレベルダウンしてしまうというのがあるのが本当のところだと思います。

もう一つ、意欲の問題が先ほどあったんですけども、高校入試の高校選択だけが意思決定であつて、それまでの中学校生活の中の子どもの意思決定はあるかというところ、その中の生活の中には意思決定はほとんどないんですね。全部準備されていて、全部やることが決まっています、全部時間設定されている。そういう中で子どもは意欲がある面ではどんどん失われてしまうのではないかな。それで最後に高校を選ぶところだけ意思決定をしなさいというのは、意欲がなくなってしまうのではないかな。個別に個性を大切にするというのは、基本的に言うところ、できるだけ接する時間をふやす、少人数である、あるいは子どもの選択権を重視するしか具体的に個性を本当に尊重する方法はないのではないかなと思います。高校の改革もそうですけれども、中学校の段階でもそういうことがこれから必要になるのではないかなと思いました。

○広瀬 土屋さん、一言お願いします。

○土屋 先ほど清水先生が、日本の子どもは勉強する意欲がなくなっているんじゃないかと言われたのですけれども、制度によってその意欲をなくされてる部分もあるのではないかと思ひます。あまにも学習の量が多すぎて、勉強する前にどうせ自分は駄目なのだと思ひ込んでしまつてゐる子も多

いのではないでしょうか。それと、今は子どもがどの高校へ入るかということが、大きな目的になりすぎているように思うので、そうではなくて、中学校の先生は高校進学を希望する子どもたちが、高校に行つてどういうことを自分が、教科でも何でも勉強することを選択していかつて、そういうことを子どもに考えさせるのが進路指導になれば良いと思いますし、高校側では、それを受けて学力差があつたり、いろんな個性の子が一つの高校で様々に自己実現していく為に、出来るだけ多くの選択科目を用意してそれに答えていく。そんな高校をどうやって作っていくかということが求められているのではないかと思つていられるのですけれども。

○広瀬 それでは加藤さん、お願いします。

○加藤 入試改革ということだけに絞つた話で終わらせていただきます。

これは個人的な見解なんです、とにかく入試大綱というものが発表されまして、これに沿つて平成九年度から実施されるのはもう既定の事実かと思ひます。たしか文尾に書いてあつたと思うんですが、改良すべき点は改良したいという文章がたしかどこかに入つていたと思ひます。これを頼りに先ほどどなたかが会場から言いましたけれども、しばらくの間混乱する。その混乱する中で受ける自分の子どもは一生に一回の高校入試だろうというのは、まさに私もそのとおりだと思ひます。自分の子どもにとつては一生に一回の高校入試がその混乱期にぶつかるのはちょっと耐えがたい氣もいたしますが、いずれにしても平成九年度から実施されるということですので、その新しい制度で入試が行われる中で、これは教文研の方の方にもお願いしたいし、県PTAといたしましても注意深く見守つていつて、県教委に申し入れる点は申し入れるという姿勢は持つておりますので、今回の入試大綱、しばらくじつとみんな様子を見ていきたいなと思つております。以上です。

○広瀬 最後に清水さんお願いします。

○清水 入試大綱については大分議論がされましたので、むしろ高校の先生が今後どういうふうにくれを改革していくかということを私は期待したいと思います。教育の問題は余にもいろいろな多様な性があり、本来的には横からも上からも下からも介入しないで、みずからが、主人公になって、みずからの規律を決め、内発的な問題提起をしなから組織に協力していく、あるいは盛り上げていくことが大切であると思います。

さらにPTA連合会もそうですが、一般の父兄もそうです。それから校長会も、組合の人も、もう少しこれをいい方向に持っていくような改革の接点をつくり出していただきたい。恐らく現場、行政が高校問題ですべて一致することはないわけです。成熟社会、市民社会というのは相手の意見を自分で統治し、そして自分から発信する。こういう習慣を身につけることが大切です。相手をやっつけても何のプラスにもならない。消耗するだけです、率直に言って。やっぱり自己蓄積、自己統治をしなから相手の意見をふんだんに吸収していくことをしないと前進しないのではないかと。

私は、いろんな意見を、こちらのお母さんの意見も一つの発信だし、恐らくここにいる方はみんなそれぞれ違うと思います。例えば高校全入、あるいは格差是正と言っても受けとめ方はそれぞれ違います。それぞれの違いを認めてどうやってみんなが一つ一つ、こうした問題を克服するかにあります。自己統治、これを持たないと前進はしないのではないかと、こういうふうに私は思います。とにかく皆さんのきょうの質問、意見、本当に私はありがたく受けとめます。ありがとうございました。

○広瀬 どうもありがとうございました。

最後のまとめは行ないませんが、とにかく先行きが全くわからない、不透明な状態で来年度から高校改革が始まる。その成り行きを我々一人一人が注視していく必要があるのではないかと思います。

きょうは大分長い時間になりましたが、どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 コーディネーター、シンポジストの先生方、どうもありがとうございました。
最後に、当神奈川県教育文化研究所理事、川井田憲二より閉会の言葉を述べさせていただきます。

閉会の言葉



○川井田憲二 県教文研理事 本日は雨の中、お忙しい土曜日でございますけれども、多数のご参加をいただきましてありがとうございます。

本日の参加は一四七名という報告を受けております。フロアからの貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

当研究所も皆様方の貴重なご意見を生かすために、今後とも議論の深まりと、さらなる広がりをお求めながら、今後の研究に生かしていきたいと思っております。

これをもちまして第六回教文研教育シンポジウムを閉会にしたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

—閉会—

参加者感想文

☒ 中学生（二年） 高校生（一年） 大学生（二年）が現在おります。神奈川県に来て一一年目です。三人とも公立中学です。高校の進路については、ア・テストが少々とれていてからと、何とか親としては希望以上の学校へ行かせられました。ただ、上の子がとても学校へ行くのが楽しみだったのに対し、下の子はあまり学校は楽しくないようなのが心配です。一人は公立校を失敗しております。受験当日はかなり自信があったようですが、今迄はどこかしらの高校へ入れる甘さが子供たちの中にはあって、自分のレベルをどんどん下げていってしまう弱さを見て来ました。もうそろそろ改革してよいと思います。最初は混乱すると思いますが、子供達ももっとしっかりした自覚を持って受験に望むと思います。

今日は、かなり具体的な話が見えてきて、勉強になりました。

☒ 希望者全入で困るのは教師（中学）？ そんなことはないと思います。逆に、今は入試に合わせなければならぬためこみ教育にならざるをえません。もっと自主編成をしながら、何をどう教えたか考えさせたりするかという、教師の力量を高めるためのゆとりが必要。

入試改革について、格差を是正と称して特色ある高校などとよりわけのわからない（きつとだれもわかっていない）方向に置きかえているだけではないだろうか。

しかし、実際に動き出すわけだから、浅井さんが言ったような、いわゆる進学校といわれる高校がどう変わるかにかかっているのではないか。

会場からの質問・意見にうなずくものが多かった。

子供中心のものにしたいものだ！ 教育後進国日本ではいけない。

☒・高校の入口で限定してしまうような「個性化（多様化）」でなく、生徒が入学後に多様な選択が出来るような「多様化」をすすめてほしい。

高校間の単位互換性、公開講座などを積極的に行ない、そこから格差を崩す方向性を。

・「子どもはみんな名門校に行きたがっている。大学進学を希望している。」という見方はウソだと思ふ。大学のことなんて考えてない人も多いし、「普通の学校」に行ければ良いという子は案外多い。むりに名門校をなくそうとして学区分割がすまないよりは、名門校はそのままにして、他の（主に新しい）高校の格差を解消し、「底辺校」なる存在をなくす方が現実的では？

・今日の「改革」の事情が少しわかってよかった。次回からテーマを絞って開催していただけたらと思います。

☒ 「改正大綱」にもとづく改革が動き出したとき予想される高校の姿、中学の進路指導の姿がとても現実的で、考えるよすがとなったような気がします。

県P協の「高課研」への意思反映の経過が報告され、驚いています。

☒ いろいろな意見が聞けて興味深く時間を過ごすことができました。「不透明な部分はやっぱり不透明だったのか」という感想ですが、しかし、改めて問題点がよくわかり、勉強になりました。

子どもにとっては一回きりの高校入試であり、教師としても親としても、他人ごとではない問題です。少しでも希望がもてるよう考えていってほしいです。

☒ 興味深く聴かせていただきました。時間の関係もあり議論の深まり、発展は難しいと思います。今日のシンポジストの話を自分なりに考えてみたいと思います。

☒ 教文研が提起した報告書『高校教育改革の方向と課題』をたたき台にして、現行の教育改革をど

のようにおすすめしていくか、県民にいかにかPRし、コンセンサスをつくるかが、緊急の問題だと考えます。運動を連動し発展させる一つの核として、教員組合の実力が問われているのではないでしようか。

☒ 本日配布された教文研資料シリーズⅢの一八一―一九ページ(二)に書かれていることが、日本の選抜制度の問題のすべてだと思う。

教育の本来の目的を、教師も親も再認識しない限り、議論はどうどうめぐりをするだけだろう。(学歴を大切にすること自体に問題がある)

高校に行っても行かなくても、「同じだ」というくらい意識を持つように啓蒙していきましよう。

☒ むやみやたらに高校改革といながら、現場の声が反映されていないような気がします。私も教師として、どう進路指導をしたらよいか迷っています。個性を大切にといいつつ、子どもたちの個性をつかめないまま、今年も半年がすぎました。とにかく、仕事が忙しすぎます。子どもとじっくり話し合えないまま、進路指導をしなければいけないのかと気が重くなります。結局成績に頼らざるを得なければ、進路指導が教師はできないのです。むやみやたらにいじらないでほしい。

☒ 久しぶりに参加したが、今もこの程度の討論をくりかえしているのに少々がっかりした。発展討論はないのか。

また、質問者の多くが、この課題検討に所属している人の同志うち、内ゲバのような気がした。あまり聞いていて気持ちがよくない。

この会が組合の動員で成立しているようでは、開かれているとはいえない。この会を解散したほうがよい。とても視野がせまい。

どうしたら入試を改めるのかを具体的に話していけばよい。

こんな会での成果は、世論では受け入れられない。

◇ 苦労様でした。

ちょっと気になるのですが、一九九七年度本格実施になるまでいくつか検討課題が残されているはず。そのことが何らふれられず、具体的な論議がなされていたが——どうでしょうか？ やっぱり、終わってみても何も印象が残らないのが残念です。

◇ 参加する都度、学ばずば学ぶ程、暗部に入るシンポ。しかし、子どもという人を愛して彼達の未来に向って苦労と努力をして、カツ生き生きする子どもと生きていきたい私として、今変ってしまった入試に明るいものを見つける努力をします。

県教委を悪者論者としてしまうにはあまりにも貧しいので……（教育、子どもを大切に思っている神教委と信じていますので）。アメリカトが多くなつた時、改革を改革する用意をしてほしい。教師の仕事の条件整備と対象者（仕事の）である人権を持った子どもの生きる為の教育を受ける（最後の質問者にもありました）条件整備（入学者を増やす計画、進学率を上げる）を分けて考えて欲しい。

提案として ① 県教委と教職員（組合執行部外の教師、非組も含めて）

② 県教委と子どもを思う大人（選び方、呼びかけ方はむずかしいが利害を越えた人）によるシンポ。

教師は全てマルチではない。個性豊かというか能力様々という点と、親の子どもの教育を考える意識の差があるのだから、制度の検討にゆとりと時間をかけて欲しい。

県教委入試改革にたずさわったメンバーにオブザーバーとして参加して（発言なしでもいいので）

いただくことを考えて欲しい。参加してよかった……これが結論です。ありがとうございました。

清水先生の「自己蓄積」「自己発信」大賛成。

☒ 最後にパネリストの加藤氏がおっしゃった様に、入試の制度が決まってしまってから、「あそこが悪い」「ここが問題だ」と言ってもしかなかったが、制度が決まる前に議論を深めるべきである。

またテーマが「高校改革をどう進めるか」なのだから、今後の高校のあり方を議論するべきで、入試制度について議論するのはピントがずれている。高校の先生と高校生の保護者がパネリストに入り、どんな高校が望ましいのかを議論するべきである。

☒ 親の意見が出やすいような工夫をしてほしい。たとえば、質問用紙を事前に配るとか。

第六回教文研教育シンポジウム記録

高校改革をどう進めるか

—ポスト神奈川方式をめぐる—

1995年2月28日

発行：神奈川県教育文化研究所
横浜市西区藤棚町2-197
神奈川県教育会館内
☎ 045-241-3531

印刷：(有)神奈川教育企画
☎ 045-253-3435

KYOBUNKEN